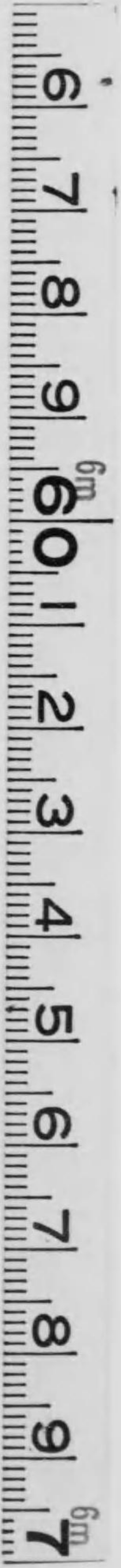
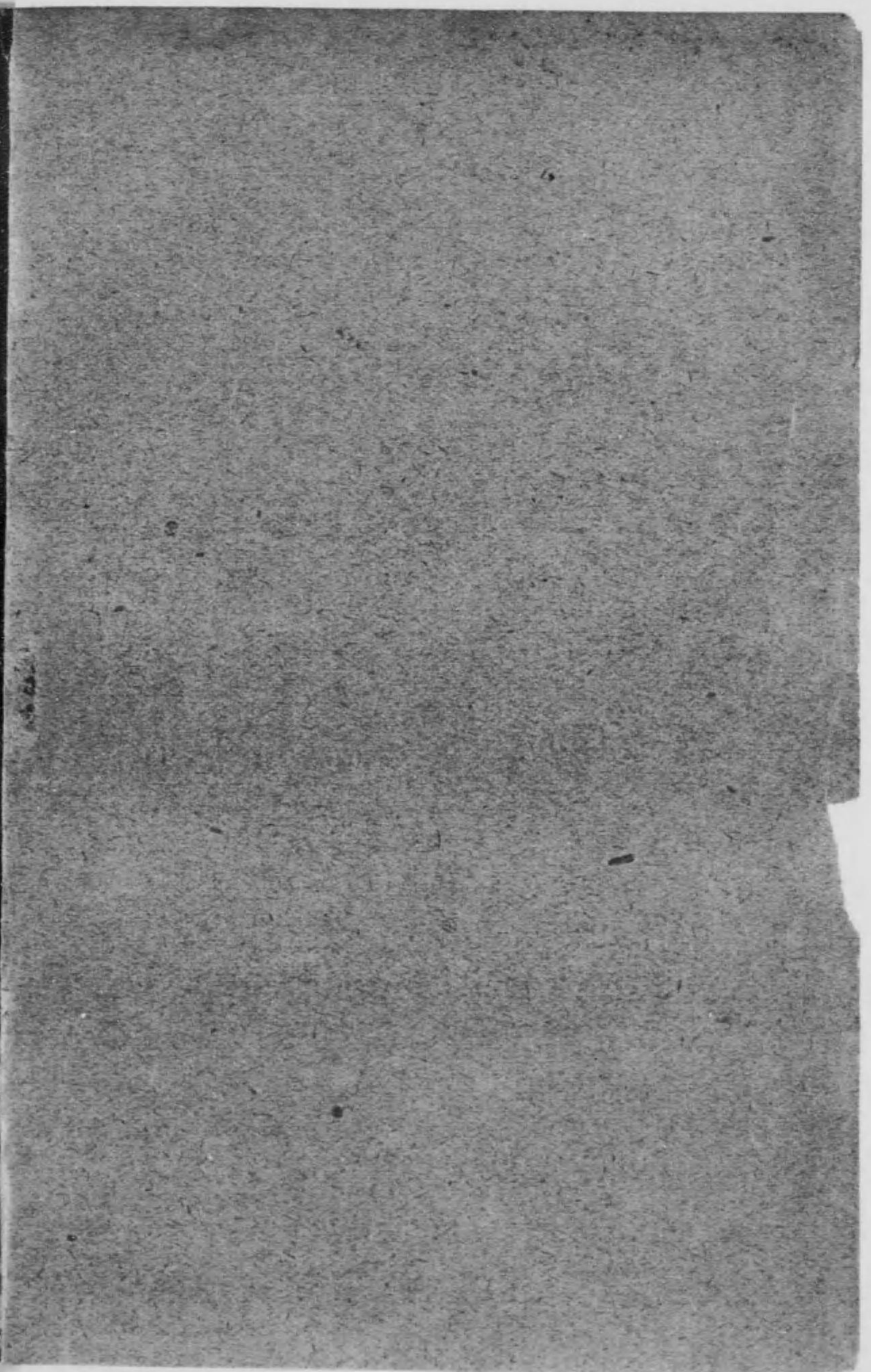


31
551

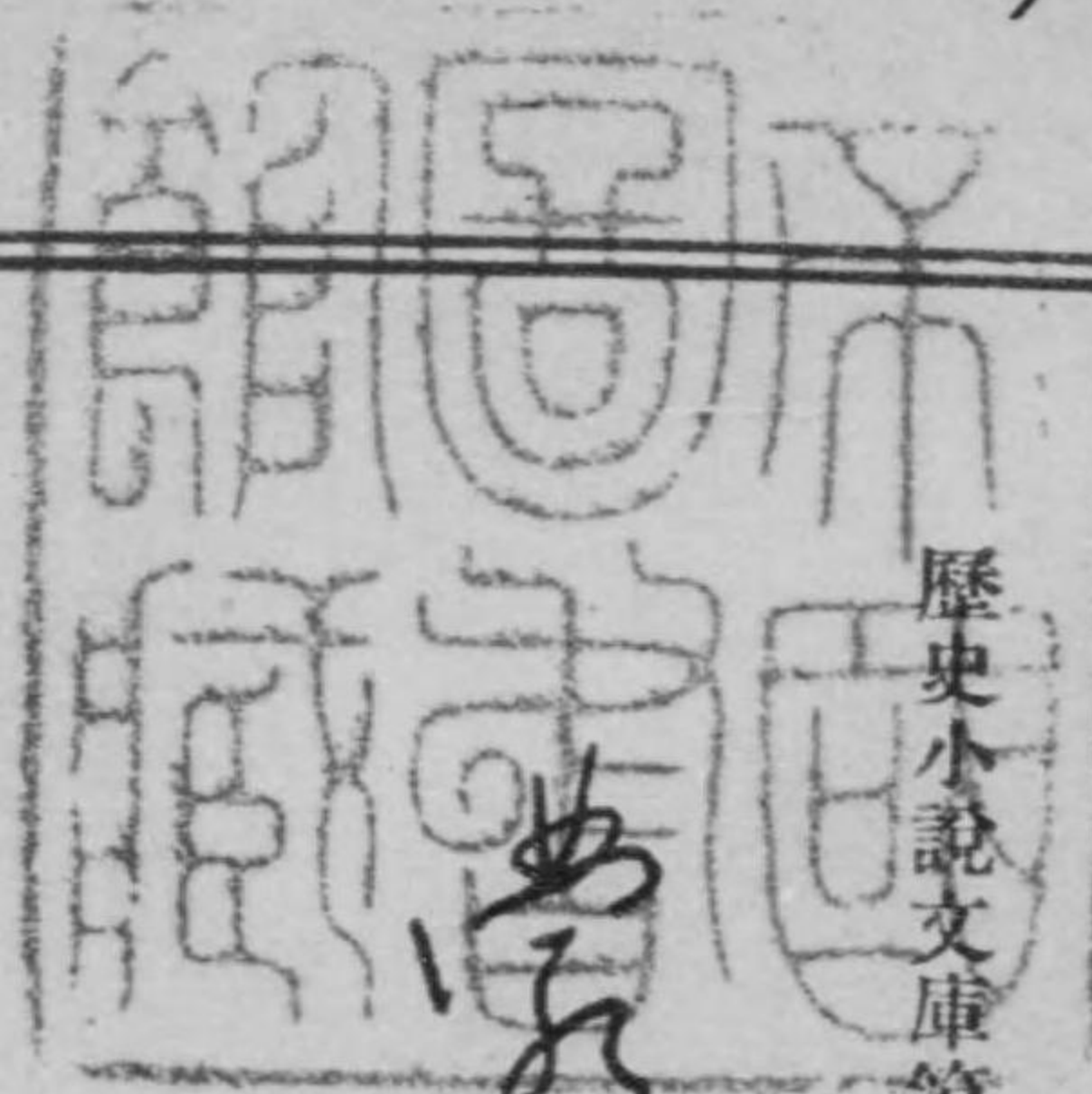


始





31-551



歷史小說文庫第四編

古來

小井 復村 著

大正
7.9.17
内交

卷頭語

亡き妻の一周忌の日に、子供を連れて菩提寺へお詣りした時、卯月の雨に濡れて咲く木蓮の花の蔭で、舊い昔の小学校の先生に出逢つた。

傘のうちなる立話は短かつたが、別れて後の思ひ出は長かつた。自分が小学校で『四百餘州を擧る、十萬餘騎の敵』と唱歌を習つた昔に比べて、老先生の態度は些しも變つてゐないやうな感じがした。凡らく先生も、手におへぬ腕白子供その儘に、現在の自分を見られたに違ない。

春夏秋冬、一年三百六十餘日。——十年一昔の故郷から忘れ勝に、懐かしい都の空に馬蹄を拾ふた足跡を顧みて、自分は底知れぬ侘しさと懐かしさに嗟られるやうな思ひであつた。

三十有餘年の過去。未知数の未來。——三人の子供の父として、兎も角も生きて行かればならぬ前途に、この上どれ程の苦楚を嘗めなければならぬのか。

何事も子供の爲に。——淡い儂い諦らめの前に、凡下の執着を犠牲にする表情には、人の知らぬ悩みもある。悲しみもあらねばならぬ。

老先生が、年々歳々仕立て、ゆく教へ子の生涯にも、各自の宿命によつて支配さるゝ吉凶があつた。——一度、昔の竹馬の友が一堂に會して、老先生を招じて、その後の物語りに興じてみたいと思ふ。
『蒙古來』の巻頭に慙うした事を録したのは、『四百餘州……』の唱歌を教はつた因念からである。

大正七の卯月

著者

故郷前橋にて

目次

一 極樂寺の小笠懸……………二頁

二 文永の天災地妖……………九

三 宗尊親王の陰謀……………一五

四 怖ろしき流言……………二三

五 僭上無禮なる國書……………二九

六 雲遠き蒙古王城へ……………三六

七 英雄僧日蓮の雨乞ひ……………四四

八	片瀨龍ノ口の法難	五一
九	對馬の沖の怪し船	六〇
一〇	禽獸に等しき慘處	六九
一一	戀づまに再三の使者	七六
一二	誰か知る大鳳の志	八三
一三	元使一行の梟首	九一
一四	蒙古征伐の命令	九八
一五	西海將士の意氣	一〇五
一六	石清水の御參籠	一一三

一七	玄海灘の日本晴	一二九
----	---------	-----

附 録 天目山の悲劇

一	おゝ！ 燈が見ゆる	一
二	嗚呼、然もあらう	八
三	事ありげな密書	三
四	所詮は散行く花	一六
五	動くな！ 入道	二〇
六	危い哉、甲斐の館	二五



來
平井晚村著

四

- 七 せめて最後の御供……………三〇
- 八 噫！父祖の國！……………三三
- 九 勝頼主従の最期……………三六

——(目次終)——

二
（一）極樂寺の小笠懸

此處は相模路

うねくと端山めぐれる鎌倉の秋の日頃を海吹く風の晴が續いて、拾欲しさの針坊主さへ忘られ勝の空の高さ、邸々の武者窓に木犀の花ゆくらくと匂ひこぼれて、思ひ無けな町家の暖簾に、茶殺煮る柴の名残が人影を長閑に見せた。まこと、この年來の天下は靜謐、最明寺時頼と云ふ慈悲佛が執權となつてからは、稻穂扱く土民も、弓矢とる武士も、おしなべて睦み合つての國土の寶、上下心を一つにしてその分に安んずるなかに、變らぬは武士の魂、鞍置く駒の手綱染色頼母しい世の態であつた。

「今日は極樂寺へ將軍家が成らせ、小笠懸を御覽なさる氣ちやが、はて、誰殿の弓勢がすぐれてやら」

「殊には何人にも拜見許させられるさうな。弓術は二の次、先づ執權殿御機嫌のお顔を拜みたいものぢや」

末々の歩卒までが、身に相應はしい晴衣を飾つて輕き草履を踏み集ふ極樂寺の廣庭の棧敷へ、時の將軍宗尊親王は、執權北條時頼以下を従へて威儀を正して著座した、衣紋を正して居流れし左右の大身、紫の幕、眼に沁むばかり紋り上げたる朱房を掠めて、松の嵐は心地よく吹きめぐる。

一番、二番、合圖の太鼓に誘はれて設けの馬場に現はれた面々は、今日を晴と肥えたる駒の手綱を捌きつ、鎌倉武士の腕を見よやと放ち鳥を射た。星ほどの的をも射た。やんやくと褒めそやす鯨波の聲が高まると、將軍の頬には包

み切れぬ喜悅の色が溢れた。

やがて、この日一番の見物、小笠懸の準備は出来たが、誰あつて我からの向はうと云ふものがなかつた。

群衆は手に汗握つた。

いま迄の賑はしさを忘れ果てたやうに、數ある武士はまじ／＼と顔見合せて、誰殿は在さぬか、何某はあらぬかと囁くばかり。廣い／＼馬場の秋草徒らに陽は明るく、氣まぐれ蜻蛉のすい／＼と流れ飛ぶさへ、心憎く閑かに眺められた。「誰ぞ。小笠懸を仕つるものはなきか、美事射當つるもの日本一の弓取ぞ。太刀を取らず、鞍添へて予が乗馬遣はさうぞ」

短慮一徹、親王の聲は上ずつて聞えた。——日本一の弓取——武士たる身のこれに越す聲はないが、その響の大なるだけ仕損じての恥辱も廣い。生じいに

弓絃を鳴らして面見らる、より、耳を抑へて聞かぬが無事と、應とも否とも答へるものは無い。

「射手は無きか!! 鼻を竝べた鎌倉武士のうちに、小笠懸仕つるものないとは……エ、辱を知らぬ奴輩!」

噴みつくばかりに叱咤されて、右も左も額を伏せて冷汗を拭くそのなかに、只ひとり臆れたる風もなく兩手を膝に屹として、將軍親王の面上を睨み据ゑる公達があつた。執權北條時頼の子、幼名正壽、相模太郎と呼び慣れた今のは父の『時』親王の『宗』の一字を下されての時宗、僅かに十一歳ながら、厚き肉太き骨、見るからに立優りたる骨格逞ましく父時頼の傍に控へたが、親王が膝を叩いての不興のさまに堪り兼ねてか

「お父上……お父上」

と聲を低めて呼びかけた。

「將軍家御不興に拜せられます。太郎が一箭致しませうや」

思ひ込んだる我が子の顔をちらと顧みた時頼は、靜かに首をふつて

「先づ、控へい」

と眼で知らせた。

「重ねて申すに射手もない!? 口惜しや神國の武威、斯くも頼みなう成り果てたか……快からぬ日に逢ふ身の、この上もない無念ぢや」

つと座を起つて奥に入らうとする親王の裾を抑へるやうに、執權時頼は平伏した。

「あいや。お待たせ御座りませ」

「待て……とは。射手のあるか」

「未熟ながら一子太郎、小笠懸試みまする」

「何と云ふ、太郎が……彼の時宗が小腕でな」

「不束ながら太郎美事仕りませうで、先づ御著座あらせませ」

「應! 見ようぞ!!」

舊の櫛に寛いだ親王の息は、僅かに鎮まつた。——列座の大名は、呆れたやうに時頼父子の顔を見比べた。

「執權ほどの賢者も、子の可愛さには心に雲のか、りつるぞ。何として太郎殿

小腕に小笠懸のならうや。禽に磔ちや。及ばぬ事ぢや」

嫉み心地でばやくには頓著なく、時頼は物靜かに時宗を顧みて

「將軍家お許しぢや。首尾よう仕つれ」

「承はり申しました」

時宗は親王に一禮して轟乎と起つて棧敷を降つた。ドーン、ドーンと押込まれる太鼓の音は、秋空の涯知らぬさまに高く廣く響き渡つた。――傍の松の縁のかげから、幔幕をさつと煽つて乗出したる馬上の姿
『やんや〜。いしくも頼母しう見ゆるぞ』

北條一門掌を打つて囃し立てる裏には、失策はなきかとの杞憂が漂うて居る。青貝摺の鞍豊かに片手に重藤の弓持つて、雪の白駒歩まする繪にある如き公達。苦もなげに黛刷いたる満面に笑を湛へて、二度三度馬場を飛ばすと見る間もなく、鞍壺に腰を沈めてがつきと番へて白羽箭、満月の如く弓を絞るとひゆう、ふつと切つて放せし箭鳴りも遠く、的の真中鮮かに射貫いた。歎聲はどつと起つた。
『お美事候々々』

譜代の郎黨は、嬉し涙に暮れながら、時宗が乗つたる駒の轡に絶つて幔幕のうちに匿れた。親王は太刀駒を賜うて厚くこれを賞した上に、時頼に向つては『天晴の後継持たれて、この上の吉祥もない。芽出度う存する』との御説があつた。

（二） 文永の天災地妖

執権の館では、その夜一族を集へて時宗が爲に身祝ひの酒宴が催はされた。『太郎斯くてある限りは、鎌倉山に風も立つまい。……由井ヶ濱邊の浪も靜かに、天が下安らかに在らせたものぢや』
子を知ること親に若かず、時頼は深く時宗の才膽に恃む處があつて、心ゆか

しの盃を祝ひ納めた。

その後の幾年。

執權時頼は剃髮して最明寺殿となり、太郎時宗十三歳で執權となつたが、幼若元より天下の公事を捌く事もならぬので伯父政村が輔佐となつて鎌倉幕府の威を振うて居た。斯る程にも、時宗は父最明寺入道の訓を守り、柔剛併せ備ふる天品の才華は、日と共に、月と伴に、めきくと現はれて來た。

「太郎殿自ら公事を扱かう日の來たら、定めし目ざましい沙汰の多からうぞ」峽の暗きに陽を待つやうに歡びの聲が、鄙にも都にも充ち溢れて居るうちに、やがて文永元年に入ると不思議や鎌倉には天變地異が打續いた。

彌生明るき櫻のもとに、瓢叩いて浮れて居ると、拳を擴けし悪形の雲、窓から枇杷の實ほどの雹が降つて、遊山の群に些なからぬ怪我人さへ出來た。

「櫻の花に雹の降るとは、怪しい事ぢや」

空を仰いで呟いて居るうちに、蟬啼き初むる六月には軒も柱もゆがむほど地震が振つた。秋の洪水に稻刈り唄も聞かれず、荒涼たる寺々の鐘に霜が降つて、その年も末の師走四日の宵かけて、彗星が蒼光る尾を長く曳いて凍れる雲間に隠見した。

「このやうに不思議の續くは僞事でない。氣が、り晴」

暖簾を疊む街々で宵寝をすれば、武家屋敷でも不寝番を置いて警戒する。幕府にあつても捨ては置かれず、鎌倉御所へ天文博士を召して吉凶を占はせると「紛れもなく天下御大事の前兆、不祥不吉の象で御座る」

と言上したので、執權輔佐の政村までが眉を擧めて、神官僧侶に命じて御祈禱祭祀の事を取行はせたが、何の印もなく、依然として怪しい雲は空に亂れ、

黄に紅に映り濁る夕陽の渦の奥に、悪魔の顔を見たとも云へば、天鼓の音を聞いたとも取沙汰する。天も地も一つとなつて、人間界も盡くるではあるまいかなど、活きたる心地もない軒から軒へ、寺々の祈の鐘が悲しげに聞えて来る。心古り行く曆の上に年の瀬は押つまつても、松賣りも来ず、餅搗く杵の音もない。壺の底に封せられたやうな人影の蠢めきが、冥府の扉を通ふやうに往來する白晝の辻に、不敵な追剥が出て紅い血を流す。巡視の役人も、町番の叱言も、上の空なる嘆きのうちに名ばかりの春立返つて文永も二年となつた。

御所へ出仕の年賀の列も、何とやら打濕つて見ゆるうちに、氷雨にまじる睦月の雪が止むと見れば、軒にも庭にも数千羽の雀が翼を縮めて死んで居た。袖乞も死んだ。假初の病の床にあつた病人と云ふ病人は藥煮る甲斐もなく、曉の風が燈明を吹き消すやうにはた／＼と死んだ。隣からも、又その隣からも、苦

提寺へ運ばれる柩の後から跟いて行く人々は

『明日の我が身ぢや、怖ろしい事ぢや』

と身慄ひしながら暗く冷たい路を踏み急いだが、この忌はしき不祥事を目のあたり見て、密かに背き嘆いたのは英雄僧日蓮に歸依せる面々であつた。就中大學三郎能本の如きは、御所のうちに出仕しても妙法蓮華經を唱へながら

『上人兼々よりの活眼今に至つて思ひ合はされた。天變地異を怖る、眼に、何故上人が辻説法の尊いお姿を拜まうとはせぬ。效もない寺々の祈りの鐘を聞く耳に、何故上人が有難い御聲を聞かぬぞ』

と熱心に法華經の有難さを説き立てた。まこと日蓮は念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊を唱へて數々の迫害を受け、最明寺入道にさへ用ひられずに西に東に流れ藻の苦行を積みつ、是非佛法の是非を正し、法華經の功德によつて治國

平天下の基を固めぬに於ては、天變地異は愚か、外寇の難必ず來るべしと説き立正安國論を草して時の執權時頼にまで差出したが、北條家歸依の諸宗を罵るの故を以て斥けられ、いく度か法難に殉じようとしたが、この度の天災地妖を他所には見られず、行脚の杖を鎌倉に引返して松葉ヶ谷に辻説法を試みて居たのであつた。日蓮を信するものは表裏なく庇護する代りに、日蓮を憎むものは「松葉ヶ谷の狂僧奴、活け置いては佛罰の怖れ、刀の錆に討果さう」と鐔を鳴らして詰め寄るもあつたが、日蓮はちつとも騒がず

「拙僧は私利私慾の爲に辻説法はせぬ。法華經の御爲、國家の御爲、如何なる苦行も厭ひ申さぬ」

と自若として法敵を説破したので、日蓮の名は善きに悪しきに焔の如く高くなつた。

時宗は館の奥にあつて無残なる世上の沙汰に獨心を痛めて居た。——今日
は雨、昨日は雪、机に落つる陽の影さへ臉に沁むばかり寒かつた。彼は父最明
寺入道の如く一圖に日蓮を狂僧とは思はず、辻説法の精神と云ふを人傳てに心
の隅へ疊んで置いた。

其處へ伯父の政村が出仕をした。

（三） 宗尊親王の陰謀

時宗は執權、政村は輔佐ながら、幼ない頃から守り立てた慈悲の眼の底まで、
政村は時宗の可愛さが沁みて居た。

「執權には、變らせなく御書見在すか」

『お、明暮の僧い雨、晴る、間もなく垂籠めて……』
手づから香を焚き薦めて對座した。

『ヤ、その御本は』

『これ……!?!』

時宗は軽く肯いて、塗机の上に読みさした一冊の寫本を顧みた。政村は常に似ず眼を鋭うしてぢり／＼と膝を進めた。

『その御本、尊き御手に繰り、淨らかなる御眼を觸るべきものでは御座りませぬ。……エ、その御本は』

『フ、これは日蓮とやらが父最明寺殿へ差出し置いた立正安國論稿、つれづれの儘に讀む。それが悪いとか』

『悪い段では御座らぬ。彼のやうな狂僧が囂言……御父最明寺殿は、法華經を

憎める咎によつて無限地獄に墜ち苦しむなど、申し居る。御父を呪ふ狂僧が手に編まれし愚稿、お身近う置かせらる、さへ通れぬ不幸、速かに裂き捨てられ』
噛んでほき出すやうな冷罵を、聞くでもなく聞かぬでもない時宗は、やをら靜かに肩を開いた。

『一應は尤もなれど、日蓮とて皇土に育ちし民草とあるからは、君國の不爲存じて立正安國論に筆は染めまい。われ等只それ丈の心を以て讀む。悪は悪、善は善、善きを探り悪しきを捨つる。……裂き捨ていでもちや』
負ひし子に道を教はる面目なさに、政村は我を折つて理れなき咎め立ての無禮を詫びた。

『ちらと小耳に狭み申したぢやが、それなる書中、外寇の難を説きあるけ。眞實お座るか。その押寄する國いづれの方、何程の勢でがな』

政村は武者髯喰ひ反らして眞顔になる。

『いづれの國、……それは判らぬ。なれど神國の外に、さまざまの國あるは眞實ぢや、佛法僧の往來せる唐土を知りつらう。又壹岐對馬と水を隔て、呼び應ふ高麗、彼國とても何時鋒を逆にして寄せぬとも限らぬ。……眞逆の變に備ふる覺悟、教へるものあれば日蓮に限らず識者ぢや、活眼ぢや。……私心を挾んで大本の是非を見ぬは凡夫愚者の慣ひ。われ等執權ともある身の習はぬ處ぢや』
この公達の胸、神や宿れる。

この公達の舌の裏、先殿最明寺殿御靈や潜める。

政村はほと／＼感に堪へぬさまに拜聴して居たが、聽て何を思ひ出してか俄かに四邊を顧みて聲を溜めた。

『いづぞや聞え上げ置いたる將軍家隱謀、近頃著つて事を急がせらる、け……』

その御内談に』

『内談とは……喃』

時宗も流石に眼を險しうして政村が眞顔を凝と見た。

執權輔佐の役たる北條政村が、事々しう時宗の前に申し出た宗尊親王の隱謀と云ふは、密々ながら隠れもない事實であつた。親王は身將軍として執權の上
に在せど、武門の權勢北條一門の手に歸して虚器を擁する齒痒さの餘り、妃の宮に俗縁ある松殿僧正良基（攝政基房の子）を奥深く招ぎ寄せて北條一門調伏の祈禱をなしつ、ある實證を擱んだのだ、政村は直ぐにも討手と、燃え立つ修羅をちつと堪へて、先づ時宗の意嚮と云ふを伺ひに罷り出たのであつた。

『將軍ぢやて、親王家ぢやて、餘りと申せば恩に慣れた致され方、自體がわれ等一門のあればこそ安康のお身の上、若しわれ等を追斥けての後の天下を何と

して統べられる。彼の假名書きの歌書く筆で人馬の指揮がなり申さうか。彼の朗詠に馴れた唇で武者押の板東聲真似られうでか。鵜に習ふ鴉……及びも付かね夢を醒まさうともせいで、却つて不思議の野望を抱く奴どもの在するとの氣振……この儘では濟まされませぬ。御思案承はつて政村直ぐにも計らひたうて』

『至極の道理ぢや。捨ては置かれぬが……然なきだに天災地妖打つゝ今この世柄、荒立て、は士民の思惑什麼あらうか』

『遠慮も品にこそよれ。此方で手を控へ居たりや、彼方で得たりと鯨波を造る。……先を越して手も足も動かさぬ工風致さいでは』

『その工風とは』

『これで御座るぢや』

政村は怖い眼を光らせて、身近う置いた銀造りの太刀を引寄せた。

『討つぢやか』

『國土安康の犠牲、是非もない儀で』

『そりや成らぬ』

『ヤ、成らぬ……とは、刃をかざして寄る敵を、その儘差置かれうとか』

『敵!? われ等敵は國外にある、蒙古、高麗さんと、大きい敵がある』政村は躍起となつた。

『エ、蒙古、高麗どこで御座らうかい。この政村申し談ずるは焦眉の急！

捨て置かば御館大事ぢやに……』

『焦眉の急と……埒もない。われ等正しき道を辿るに將軍家正しからぬ企てが何の怖れ。……將軍家招きに旗を建つるもの幾頭あらう。それ知らぬ御許でも

あるまい。所詮は殿上の戯れ、陽の前の薄氷ぢや。……この上は將軍家お身の程知らせ参らするが一ぢや』

『什麼せいの御意で』

『勢子を並べて一方の途を開くる。命欲しさの兎狐は、草に匿れて逃ぐるものぢや』

謎は解けた。——政村はいつも乍らの時宗が智慧の廣さに感服しつゝ、密議を凝して退出した。

《四》 怖ろしき流言

その夜のうちから物の具嚴めしう鎧へる武者が、ざわ／＼として將軍御座所

の近くを廻り歩いた。松殿僧正が坊の近くにも、同じやうな鎧武者がちらついたり。

やがて事無うては濟むまじき不隱の噂のうちに、國々の將士は執權よりの召によつてぞろ／＼と鎌倉に馳せ集まる。何の爲の武者揃ひぞ。何の爲の鞍置く駒ぞ。寄ると障るとその噂に膽も冷す士民の聲の高まるうちに、凶年ながら花は紅く梢を染めて、春を悲しむ禽の聲さへ味氣なく、彌生卯月の草深々と庭繁る夏の初めともなれば、屋根歩く宵の鴉に心措く世の態の心細さ。——政村はこの時に乗じて、日に夜をついで諸將を邸に呼び集へて密議を開き、市井に流言の徒を放つて裏表から宗尊親王を脅やかした。

『明日にも執權殿武者揃ひして、然る方に仕かけらる、けぢや。それも早や叛謀の天罰、思ひ知る事であらうわ』

指をさ、ぬばかりの耳痛き言葉の針に、脛に疵持つ親王は居ても起つても在られなくなつた。松殿の僧正とて同じ思ひ、その他一旦の心惑ひから親王の謀叛に肩を入れようとした諸大名も、北條一門の手配り水も洩さぬ有様を見て取ると、わが身大切の曾呂盤から首を縮めて静まり返つたので、宗尊親王は誰を頼りに語らはん由もなく、六月中浣の宵闇に乗じて女乗輿に匿れて悄悄と脇門から鎌倉落の途を急いだ。

晝夜の見張、御所のなかにも間諜が入れてあるので、親王落去の報は打てば響くが如く時宗の耳に入つた。松殿僧正も亦姿を匿して高野路へ志したとの事であつた。時宗は政村を召して

『途すがら無禮あつてはならぬ。見え陰れに暫しがほどお送り申上げいでは叶はぬ』

と命じた。政村は忌々しげに舌打ちした。

『いつも早やその御慈悲と云ふが悪いぢや、以前は兎まれ、今は冥罰を怖れて逃げ失する謀叛人、何しにそのやうな……』

『然申すまい。この度の儀とて、將軍家御自らの思し立たせではない。陽の前に鏡を立て、我から眩しさに昏めくとも知らぬ者共が仕業、將軍家は唯その鏡ぢや。一旦の曇りさへ除れたら強ひて碎くにも當らぬ。假初ならぬ竹の園生のお身ぢや』

『して、松殿僧正は……』

『これは高野へ遁る、まで確と見届けい。京洛ほとりに足を留むるなりや屹と沙汰せねばならぬ』

水の流る、如き裁斷の前に、政村は争らふ言葉もなく座を起たうとした。

「將軍家落去のあとは、幼なき御子を御跡に崇むる。……この儀密かに將軍家に知らせ参らすぢや」

時宗の命ずる處は、罪を憎んで人を咎めぬ寛大な沙汰であつた。長幼の序、上下の別、居ながらにして失當なき指圖に、久しく仇に武者揃ひせる將士は胃の紐を行水の涼しさに解いて

『新將軍はお三歳の嬰兒、執權殿もお氣の疲る、事である』

と、事無く濟みし謀叛の噂に送られながら、松殿僧正は高野の山へ。前將軍宗尊親王は山時鳥啼く／＼に現なや輿に搖られて、野越え山越え青草の路の遠きに京へ戻る途すがら、時宗が情とあつて傳へられたる新將軍が身の上、雅康親王お三歳ながら障らせもなくお跡を踏ませ給ひし由と聞くからに、安堵と欣びと悔悟の念が雲の如くに胸を鎖した。

別れ來し乳香兒が手に、譽れある將軍の冠を持たせて守り立つる時宗が情け——それも思はず隠謀を企てたわが身の智恵の淺きを怨めど、今更に掌を洩れ落ちし拳を揃はう術もない。——暗い／＼人の世の涯の歩みに餘命を托して、立もどる雲のかけ橋、鎌倉の首尾斯くと聞えし雲の上にも眉晴る、御沙汰はな、昨日の榮華に引かへて埋れ木の宮の行末、自業自得と云ひながらいとほしくもお氣の毒の極みであつた。

鎌倉は靜かになつた。

由比が濱波見るかぎり砂は白く、松青き山々に變りなき陽は登つたけれども依然たる天災は雨に風に國土の民を惱ませた。

龜山天皇の御宇、文永五年、相模太郎時宗は輔翼を廢し、十八歳にして執權職となつた、この布令を聞いた邊土の民までが、これをしも打續く不祥のなか

の欣びとして、來るべき吉祥の前兆と祝ぎ壽いた。
 鎌倉御所に年賀の列の絶えやらぬその年正月、兼て英雄僧日蓮によつて唱へられた蒙古來の凶夢は、事實となつて現はれた。高麗の臣幅阜を案内として九州太宰府へ乗附けた唐船からは、嚴めしう太刀鋒を連ねた蒙古の使者が堂々として上陸した。

『われ等は蒙古王忽必烈の國書を捧けて参りしもの、鎌倉へ案内されい』
 笠にか、つて申入れたが、骨の硬い九州武士は容易にこれを肯はなかつた。
 『神代この方、外夷に國土を踏ませた例は御座らぬ。この國書、法を以て鎌倉へ傳送致すで、返書到着まで當地に滞在を願ひたい』
 俄かに寺の書院を淨めて使者を招じ、内外の山門には長大小を打込んだ武士が、怖い眼を光らせて肱を張つた。太宰府から鎌倉まで、その返書を待つ間は

決して短かくない。徒然に飽きて外出しようとする、役人がこれを拒む。強つて言ひ張れば刀の鏑を鳴らす。——これにはほとく使者の一行も當惑した。——蒙古にあつて聞くからに、蓬萊島(日本)の不老境と懐かしく思つて居た想像はがらりと外れて、窮屈な應接、僅かに宿所の庭面の梅に、うつり行く日數を惜むより外なかつた。

《五》 僭上無禮なる國書

蒙古王の國書は太宰府から鎌倉御所へ傳送された。その國書には次の如く認めてあつた。

上天眷命せる大蒙古國皇帝、書を日本國王に奉ず。
 朕惟れば古より小國の君も、邊土相接はれば尙努めて講信修睦す。況んや我祖宗天の明命を受けて、奄いに區夏を有つ。遐方異域威を畏れ、徳に懷く者悉く數ふ可からず。

朕即位の初、高麗無辜の民を以て、久しく鋒鏑に痒る。即ち兵を罷めしめて、其疆域を還し、其旄倪を反す、高麗の君臣感載して來朝す、義は君臣といへども歡びは父子の若し、計るに王の君臣も亦已に之を知らん。高麗は朕の東藩なり。日本は高麗に密邇す。開國以來亦時に中國に通ず。朕が躬に至り、而も一乘の使以て和好の通ずるなし。尙恐らくは王の國之を知ること未だ審かならず。故に特に使を遣はし書を持して、朕が志を布告す。
 冀くは今より以往、問を通じ好を結んで、以て相親睦せん。且聖人は四海

を以て家と爲す。相通好せずんば、豈一家の理あらんや。以て兵を用ひるに至らば孰れか好む處ぞ。王其れ之を圖れ。

又別に高麗王の添書には次の如く認めてあつた。

高麗國王植右啓す。

季秋闌なるに向ふ。伏して惟れば、大王殿下起居萬福、膝起々々。我國蒙古大朝に臣として事へ、正朔を受くること茲に年あり。皇帝の仁明天下を以て一家と爲し、遠きを視る邇きが如く、日月の照す所、咸其の徳化を仰ぐ。今貴國に通好せんと欲し、寡人に詔して曰く、海東諸國日本と高麗と近隣たり。曲章政治嘉するに足ることあるものなり。漢唐下つたかた或は使を中

國に通ず、故に書を遣はして以て往かしむ。風濤の險阻をもつて辭す事勿れ
と其旨嚴切なり。

茲に已むを得ず、朝散大夫尙書禮部侍郎潘阜をして、皇帝の書を奉じ前去
せしむ。且貴國好を中國に通ずること、代として之なきはなし。況んや今皇
帝の好を貴國に通ぜんと欲するもの、其の貢獻を利するに非ず。但無外の名
を以て、天下に高うせん爲のみ、若し貴國の報旨を得ば、必ず厚く之を待た
ん。其の實と否とは、既に通じて後當に知るべし。其れ一介の使を遣はし、
以て往て之を觀せしめんは如何。唯貴國商略せよ、至元四年九月啓。

緊めつ緩めつ脅しかける蒙古王の國書と、臍甲斐なき己に比べて事なきうち
に膝を折れと云はぬばかりの高麗王の添書とは、鎌倉御所なる評定所の奥に披

かれた。幼少なる將軍は簾中の据ゑるもの、この大難の眞面に立つて紛々たる論
義を捌く第一人者は、誰あらう年少十八歳の執權北條時宗であつた。

鬼神を挫ぎ、魔王を屠る出仕の百將も、流石に蒙古の大國と云ふに聞き怖ぢ
してか、險しき眼を時宗の一身に集むるのみで、押切つて我を張るは無かつた。
政村は一座を見廻して時宗に面を向けた。

『この國書、京都禁廷へ差出さうでは濟みますまいで』

『云ふまでもない。先づ以て主上御眼を汚さねばならぬ』

『蒙古への答書、唯禁廷の思し召に任せさうでか』

『否、その儀に就て、時宗一同に存する旨を圖りたい』

時宗の切長の眼は鏡の如く、斜めに簾中を見上げて目禮しながら

『これには將軍家御出座。又われ等不肖ながら執權の職承はる。……征夷大

將軍の御旗の下に弓矢を預かり、禁廷御寵恩に浴する各位、身を楯にして君國を守護すべき時節到來。……因つて、これなる國書を執奏する前に、われ等微志のある處を雲上へ聞え上げたと思ふ』

と重々しく云ひ切つて、屹と座中を見た。その眼に映る人々の唇は、漆を塗られたやうに閉ぢられて、水を打つたる如き沈黙の静けさが暫らく續いた。

『執權御存意は何と在さう』

政村は筒拔けるやうな一語を投げた。

『無禮、僭上、わが皇室を侮どりたる蒙古王の口上、答禮なぞ要らうか!? 神の御掌に造られたる皇國柄、一系の天子在します禁廷に於て斯る牒狀を取上げさせ給ふべきで無い。時宗有する旨は、只この儘に捨て置かする已、使者の奴輩一からけにして追ひ返す迄ぢや』

舌を慄はせて獅子吼した時宗の面上は火の如くに輝いて居た。一座の百將は黒雲の奥なる空に月の出を仰ぐが如く、ほつとばかりに息を吐いて搖さくくと膝押進めた。

『源平の不和、藤橘の反目、それ等は國內の争ひ、この度は品違うて外寇に備へるぢや。……上下一致、國土を擧げて禁廷へ御奉公申上ねばならぬ。殊に武門武士たるわれ等、弓矢預かる程の將士の覺悟、一刻も忽にはならぬ』

時宗の顔を仰いでがつちりと呑込んだ諸將の眉はきりくると逆釣つた。
この評定の旨を取り添へて、蒙古王の國書を京都へ上つた。殿上の驚駭は竝竝で無かつた。不取敢二十二社へ幣を奉つて國土安康國難除去の祈禱を籠めたが、答書に對しては時宗の進言のまゝに打捨て、置く事となつた。前後百餘日、太宰府の梅も櫻も葎と盡きて、若葉仄めく頃となると、時宗は使者を下し

て蒙古の使一行を追拂ふべき旨を嚴達した。

(六) 雲遠き蒙古王城へ

彼等は意外なる面持で、と宿所を出ると、濱の松風から、と唐船の錨を抜き、手を空しうして歸國の途に就いた。

『豆つぶ程の小さい國、何を以て防ぎをする。今に見よ。蒙古の大軍々と押寄せたら、太宰府も鎌倉も見間に焦土ぢや』

口々に捨臺辭して退去せる使者の船を見送ると、九州海邊は時宗の命によつて嚴かに兵備を修めた。禁廷では花山院大納言を伊勢神廟に遣はし、宸筆の宣命及び幣帛を奉つて蒙古の難を免れん事を禱らせられた。

この一條を傳へ聞いた國々の民は、今にも蒙古の大軍が寄せはせぬかと度を失つて騒ぎ立てた。殊に鎌倉御所にあつては連日連夜の評定のうちに、怪しき星の飛ぶに驚き、季ならぬ夏の氷雨に爐を開く不祥の末が、皐月十二日の眞晝には、天上の日輪が二つに割れて血の色せる雲が翹あるもの、やうに亂れ飛んだ。この時……松葉ヶ谷の辻説法を試みて居た日蓮は

『これ等畢竟自ら招ける災ぢや。法華經を蔑に致した佛訛ぢや、速かに邪惡の宗を去つて正法に歸依するより外、蒙古を調伏する途はない』

と嗟嘆して、法弟信徒の留むるのも聞かず、執權時宗に上書して、諸宗の學者知識と對決の儀を願ひ出た。又建長寺の道隆、極樂寺の良觀、その他にも書面を送つて對決を申し入れた。道隆、良觀等は申し合せて

『日蓮は北條御一門悉く地獄へ墮ちたけに申し觸る、狂僧、捨置かせられて

は世の惑ひを深うする道理、然るべき罪科仰せ付けらるゝやうに』

と時宗へ出訴した。又一門の誰彼は時宗に膝差しつけて

『日蓮と申す悪僧、彼は蒙古に内通致し居る叛逆人、磔にかけさせられい』

と談じつけたが、立正安國論稿によつて日蓮を信する事の深い時宗は、容易に妄説には動かされなかつた。

『日蓮は坊主、蒙古に内通して何とならう、又蒙古ちやてが、一人二人の僧侶が瀬踏みに進退の度を決する筈あるまい』

『すりや、彼の悪僧をその儘に……』

『捨て置け、日蓮の持論にも妙味はあらうぞ』

『ちやと申して、良觀、道隆等の面目潰いては御當家御歸依の宗門を輕んずる筋……』

『然らば日蓮の望み通り、對決させたい。』

『日蓮果して悪僧と極まらば、その上に處置しても遅うはない』

公平なる裁きも、良觀、道隆等には辛かつた。大人氣ないと口實の裏は、密かに日蓮を怖れたからであつた。

越えて文永六年の三月、高麗の使者申恩佐、陳子厚、及び潘阜等七十餘名は蒙古の使者黒的、殷弘等を案内して對馬へ來たが、宗對馬守宗資は頑として上陸を拒んだ。

『國書とやら、返牒とやら、取合ふべき筋でない。速かに退散せ』

渚朧ろに勢揃ひした槍太刀の閃めきに膽を縮めた黒的は、船が、りせる沖の夜すがら殷弘等と密議を凝した。

『再度の使者、上陸を拒まれたとのみおめくとは歸れぬ。大王への辯疏の土

産、何かな無うては叶ふまい』

「如何さま……この島人を引渡うて蒙古の盛儀を見せつくるも一つの手段、又征討と事極れば水先案内とするも妙』

之れ宜からうと氣づかれぬやう磯に上つて待つとも知らず、塔二郎彌三郎と呼ぶ濱の漁師が、生活の爲め章魚壺を提けて、ふらくくと磯菜の花に寢酒の酔を唄うて來ると、物蔭から躍り出た十餘人が引包んで、音も立てさせず引擔いで本船へ引上げた、その夜のうちに唐船は、帆車捲いて對馬の沖から影を消した。

「塔二と彌三が唐船に渡はれた。今頃は天竺へ曳かれて生恥を曝してゐる。不慮な事ぢや』

相戒しめて夜の濱へも出ぬ鹽屋の櫻。島商人の暖簾のかけにすいくと燕を

見る頃、鎌倉からは對馬守へ恩賞の沙汰が傳へられ、今後とも防備怠るまじとの奉書を授けられた。

對馬の濱から渡はれた塔二郎、彌三郎とは、夢見の心地で高麗の王城へ繋がれ、更に又黒的等に連れられて、見も知らぬ蒙古の奥の旅寢に泣いた。

蒙古王忽必烈は、再度の使者を追返されて淺からず憤怒したが、塔二郎彌三郎の兩名を召連れたと聞くと、思ひ返して懇ろに扱かはしめた。

「召連れたる漁夫とやら、國への土産に宮殿を見せて遣はした上、高麗王の手を以て送り還せ。その時こそ答書を得て戻らうぞ』

命によつて塔二郎彌三郎は蒙古の宮殿に誘はれ、見る眼、聞く耳、驚くばかりの宏壯なる宮居のうちに、賓人として山海の珍味を振舞はれた。

虞美人草赤き庭ひろく孔雀が遊んで、黄金の鈴に刻告ぐる丹塗の窓、銀鞍白

馬繪に見る如き楊柳の絲を潜つて案内する樓門の群臣を數へ飽せし塔二と彌三は、舌を捲いて驚嘆した。

『何と素晴らしいものではないか』

『眼の涯の山の彼方幾千里には領土が繋いで有るけぢや。この威勢に逆らうたとして、何の日本に勝目があらうか。……恐ろしいものに睨まれたは御國の難ぢや』

荐りに驚異の眼を睜つて居ると、蒙古大王直々にお言葉を下されうとの事で迷宮を辿るが如き廻廊の圓柱を繞りながら畏るゝ玉座の前へ出た。百官星の如く居流れたる堂々たる儀容に膽を奪はれた兩名が平蜘蛛のやうに額を擦るとやがて通詞は大王の御説と云ふを傳へた。

『汝等郷土へ戻つたなら、この地で見聞せる一切を語り告げて、早う歸順する

やうに申し聞けい。われ等眼中には塵ほどの蓬萊島、軍船仕向くれば瞬く暇ぢやが、隣邦の誼それは好まぬ。汝等もわれ等が民となれ。對馬如き島を捨て、この廣い蒙古の山野に富を拓け』

一も二もなく恐縮して居る眼前に山と積まれた引出もの、數々、黄金佛、唐綾錦、それ々の土産を買つて退き下ると、程なく日本へ送り届くるとの沙汰に、塔二も彌三も雀躍りして欣んだ。

この頃の蒙古の勢力は大したものであつた。

彼の有名なる侵略王成吉思汗を祖父とせる忽必烈が、南方宋金の地を略し、東方高麗を降したる騎虎の勢を驅つて、我が日本をも地下に加へようとの野心を抱いたのであつた。領土幾萬里、兵船幾千艘、思ふやうに翼に張るべき大鳳の前に、名もなき濱の海雀を引据ゑての加恩も、蓬萊島を掌に擱らう爲の方

便の一つであつた。

（七）英雄僧日蓮の雨乞ひ

その年八月、對馬の漁夫塔二郎彌三郎を載せた唐船には、高麗の使者金有成、高柔が大將として乗込み、一行百餘名蒙古王及び高麗王の國書を捧けて太宰府へ漕ぎ附けた。

『この度は是非に答書を差出されるやうに。……蒙古王の威望は、塔二郎彌三郎の兩名見聞致しある。心得の爲聞き取られたい』

使者の手から放たれた塔二郎彌三郎は、絶えて久しき郷國の土を踏み得た欣喜に涙を噉りながら、口を極めて蒙古王城の宏壯を説き、憚りながら蒙古は

月、日本は星、比べものにはなり申さぬと嘆美する頼術に九州武士の鐵拳はぐわんと鳴つた。

『汝、奇怪な奴ども、それほど蒙古が有難いなや、彼の唐船に乗つて失せろ。恥を知らぬ下郎奴』

散々な目に逢うて日を経る旅を對馬に戻ると、初めのうちは死んだ佛が甦つたほどに欣び慰めに來た島人も、兩名のものが蒙古々と褒めちぎるに興を醒まして、遂には誰ひとり訪ひ來ぬのみか

『彼奴等天竺の魔法にか、つて、日本の米の味を忘れた人非人ぢや。穢多ぢや。乞食ぢや』

と仲間から除けものにされた揚句に、蒙古王から土産に貰うた品々は、島役人に取上げられ不淨の品として焼捨てられた。

斯くして三度目の使者も、指を咬へて立去るの餘儀なき憂目に逢ふた。然し一再ならずる素氣なき我の振舞に、必ずや蒙古の大軍押寄せるであらうと不安の私語が津々浦々に繰返さる、うちに、春も過ぎ夏となつたが、これは又何とした事か、日毎の雲は空に乾いて一滴の雨だもない。井の底が干る、川床が露はれる。草も樹も凋へ疲れ、色を失ふ野山の鳥獸までが、照り續く陽に胸を焼かれて飛びも驅けりもならぬまでの早魘に惱まされた土民は、これも蒙古來寇の前兆ちや。國が減びる兆ちやと安からぬ思ひに息を細うして居た。

あはれ、雪獸上の使とだにあらば、いかなる寶も惜まじと嘆き悲しむ御所の奥にも、春蟬悲しう衰へて、皐月の末、六月に入つては襖も裂くる白光に眼も眩めき、紅を溶く一半、髪を梳く一ぱいの水にも上藤達の愁は募つた。この矢先に極樂寺の良觀上人は北條家の命を受けて靈山が峠に雨乞ひの法を修した

が何の甲斐も無かつた。

日蓮は良觀上人と併つて田邊が池の邊に壇を築き、請雨の法を修すると、見る／＼枯れ穂に風が動いて空の遠くにほぐれたる夕立雲がばら／＼と救ひの雨を地上に蒔いた。

『嬉しや、勿體なや。甘露ぢや。恵みの雨ぢやわ』

口々に喚きながら、雨の中を驅せ廻つて恐悦する庶民の唇から我を忘れて唱へらる、ものは南無の薈み妙法蓮華と咲いて、日蓮が偉大なる法力に隨喜の涙を流さぬは無かつた。

一日一夜が雨が下に涼しう蚊帳を吊つて寝た短か夜の白むと見れば、田に一刷毛の青きを加へ、人畜の眼に脈の生氣が動いた。

日蓮の名は彌が上にも高くなつて、松葉ヶ谷の辻説法を聽聞の衆は日に／＼

垣を大きく造つた。斯く日蓮の聲望が高まれば高まる程、諸宗の僧俗は躍起となつた。就中淨光明寺の行敏上人極樂寺の良觀上人は筆頭となつて訴狀を認め、時宗が寵臣たる平左衛門尉頼綱の許へ差出した。依つて頼綱は九月三日日蓮を公廳へ呼出して、神儒佛の三道を誹謗せる罪を咎め、天下の騷擾悉く法華經の惡果ぞと笠にか、つて威壓しようとした。

「汝、惡僧奴。極樂寺殿最明寺殿を、墮地獄と吐したは何故ぢや。忘恩僭上の舌むざと動かさば坊主首その儘では濟むまいぞ」

「ハ、ハ、ハ、釋迦世尊の使たるこの日蓮を誅罰あらうとの御意か。些しも恐る、處でない、いかにも極樂寺殿最明寺殿を墮地獄と申したに相違御座らぬ」

「いや。……汝。……何に依つてぢや」

「天にある日月とても、法華經の敵とあれば惡道たるを免かれぬに、最明寺殿

とて極樂寺殿とて、高が人間界の長老、釋迦世尊の前には非道の亡者、墮地獄の苦しきは當然であるまいか」

「エイ。その舌の根を」

頼綱は身を慄はせて太刀に手をかけた。

日蓮は泰然として控へて居た。

「扱て、これ程までに申し進ずる忠言お採用ないは味氣ない末世、嘆かばしい事で御座る。日蓮が申す眞、書面に認め残し參るで、徐ろに御評議下されう」

ついと座を起つて別室で筆をとつて赤心を紙に書き残して公廳を出た。その後の評定で、死罪、流刑、さまざまに論議はあつたが、時宗は

「日蓮は聞しに違はぬ英雄ぢや。この上は良觀道隆達召出して對決させい」

と嚴命した。時宗の心が慍う定まつたので、頼綱初め法華經を憎む一黨は、尙密かに謀議を重ねた末に、重頼時頼の尼御前を動かして時宗を説かせる事とした。尼御前は直ちに時宗が館に押かけて涙ながらに掻き口説いた。

「祖父たる極樂寺殿、父たる最明寺殿を墮地獄と申し募る不思議の惡僧捨て置かるゝのみか、英雄の對決のと……人の子の道であるまい。是非に日蓮を庇護さるゝならば、われ等を手にかけてからに仕て賜もりませ」

祖母と母とに取籠られて時宗は熱湯を呑むより辛かつた。

「致し方もない。日蓮儀は屹と處刑申付くるで御座らう」

「嬉しや。然らば日蓮奴は、われ等をふまゝになさるぢや喃」

恩愛の梓、慈悲の柵、時宗は心を鬼にして日蓮の處刑を尼御前に打任せた。

尼御前は直ちにこれを平左衛門尉頼綱等に申し傳へた。

日蓮は死罪と極つた。

法華經の信者は膽を刺さるゝばかりに驚いたが、極樂寺、淨光明寺、その他諸宗の寺々ではわが世の春とばかりに打欣んだ。

《八》 片瀨龍の口の法難

文永八年九月十二日。日蓮の僧房は多くの捕史に圍まれた。平左衛門尉頼綱自から馳せ向うての指圖と聞くと、日蓮は經机の上の法華經を巻き納めて懐中した。法弟、信徒の立騒ぐなかに日蓮は從容として端近く立ち出で、口穢なく罵り喚く人々に支へられて瘦馬の脊に掻き乗せられた。

『法華經の爲に一身を捧ぐる。この上の欣びが何あらう』
 手に珠數かけて法蓮華經を唱へながら曳かれゆく大路小路、魚町から小町通り、鶴ヶ岡から長谷へ抜けやがて、片瀬の龍口明神前の處刑場へ著いた頃は、秋暮き黄昏の樹に、蝸が悲しく啼いて、十日あまりの月影が仄かに空に上つて居た。途すがら日蓮の法難を聞つけて慕ひ集まつた二百餘名の信徒は、四條金吾を眞先に、歎の涙を袖に押へながら去り敢へず處刑場の矢來の外に押並んだ。

篝火を焚き、幕張り繞らした處刑場の入口で馬の脊から降ろされた日蓮は、静々と敷皮の上に端座して、暗き矢來の外に起る題目の聲を世にも嬉しげに聞いて居た。

劊手依智三郎直重は、二尺あまりの太刀をぎらりと鞘拂ひして日蓮の脊後に

起つた。

平左衛門尉頼綱は床机にかゝつて

『悪僧、思ひ知つたか』

とせ、ら笑つた。

『御身等こそ程なく思ひ知る時が來ようぞ。蒙古來寇、國家滅亡、それ等總て法華經を輕んずる冥罰ぞ』

『未だしても不埒な口上。……斬れ、早う斬らぬか』

依智三郎は畏まつて、太刀取直して日蓮の頸筋を睨んだが、何かは知らず胸寒がる、心地であつた。

『御坊よ。頑固な事云はれずと邪宗を捨てられぬか……拙者、身に替へて命乞ひ致さうに』

「お心づくしは恭ないが、日蓮は法華經の爲に身を捨つるが本懐で御座るで、御苦勞ながら首級打つて下され」

斬るものと、斬らるゝものと。——人の心の誠によつて繋がれたる束の間の猶豫のさまに、頼綱は焦々と憤つた。

「三郎！何を愚圖々々……其方惡僧の首級打つが怖いなりや。餘のものに交ら

さうぞ」

日蓮は淋しく笑つて

「早うお打ち召さ」

と劊手を顧みた。——いつしかに月は匿れて、矢來の外に濃くなる闇に涙を啜る人々の小袖が、儂なけに白く仄めいた。

死の前の悲哀！

四邊はいいと水を打つたやうに靜かになつて、呪ひの眼と、悲しみの眼とが、星のやうに日蓮の身に集まつた。

鯛が又してもかなくと椎の樹の空に啼いた。

季はづれの冷たい風が何處からとなく吹き動くと思ふ間もなく、波や騒げる渚の方に凄まじき物の音が高くなつた。

暗澹たる空の色！

肌を壓するやうな不氣味の風の吹きごまよふ！！

「早う討たねか！」

堪り兼ねた平左衛門尉が、つかくと床机を離れて歩み寄るに促がされて、依智三郎は

「御坊……不惑なれど……観念なされ」

「この時から聊か風も収まつて、はたと消えたる篝の名残が僅かに土に明るく動いた。」

「ヤ、何たる不思議!。この大雨に濡れ果てた篝が又も明うなつた、……當しく日蓮様御運の開くる兆ちや」

矢來の外の人聲を聞くや聞かずや。日蓮は冷たい珠敷を揉みながら、名残の雨の降るなかに凝と坐つて居た。

處刑場を後に馬を煽つて鎌倉へ驅け出した使者は、七里ヶ濱のなか程、金洗澤の邊へ差蒐ると、彼方から南條七郎が鞭を鳴らして馬蹄を刻んで來るに逢ふた。

「守嚴お館に怪しの星が落ちた。今宵俄かに兇變。依つて日蓮法師赦免の御狀遣はさる、拙者使者を承はり参つた。處刑は未だか」

「處刑場にも異變の出來て、奉行より御赦免を乞はれう爲に館へ参る。……處刑は濟ぬ。急がせられ」

兩騎は擦れ違ひに馬を飛ばせた。斯くして日蓮は赦免された。

餘りの事の嬉しさに、矢來を潛つて亂れ入つた法弟信徒が、日蓮を中に題目を唱へ初めたが、頼綱はこれを叱らうともせず、無量の感慨に溜息を吐いて居た。

雨は晴た。雷鳴も止んだ。

さやくと月照る庭に欣びの聲は溢れて、日蓮はその場から一先づ愛甲郡依智の郷本間六郎左衛門重連が詰へ預けられ、懸て佐渡の小島へ遠流された。

〔九〕 對馬の沖の怪し船

鎌倉でこの騒ぎのある最中に、又しても蒙古の使者趙良弼、高麗の使者徐稱金貯等が筑前今津に到着した。

太宰少貳景資は物の具厳めしく鎧て趙良弼と對面した。

『蒙古よりの使者とやり、口上は何とある』

景資は喧嘩腰に言葉を尖らせた、趙もこの度は忽必烈の嚴命に手硬い談判を
持込で来たので、のさ張り返つて膝も折らぬ。

『幾度か國書を遣はしたに一度の返牒もないは奇怪至極。よつてこの度は拙者
京都とやらに罷り向ひ、日本の帝に直々國書を奉呈致さう爲に渡航致した』

『舌長し、穢らはしき外臣の分際で、上洛なぞと片腹痛い。先づ國書の寫しを

出さつしやい。取次いで遣はさう』

『いや。取次ぎでは埒が明かぬ。われ等は非に京都へ罷り越さう』

『懲りづに未だ申すか。罷り越すとて……一步も此處を踏出して見よ。眞兩つ
ぢや』

陣刀に反を打たせてはつたと睨めた見暮に怖れをなして、良弼はおぞくも前
言を取消して國書の寫しを差出したので、景資はこれを鎌倉へ傳送したが、時
宗は一も二もなく斥けて太宰府へ嚴命を傳へた。

『時宗執權の職承はりある間、不遜の國書に返牒なぞ思ひも寄らぬ。重ねて
來航無用、達つて主上へ國書捧呈致したい所存なりや、忽必烈自ら罷り出でよ
と申せ、良弼とやら、無禮吐さば討ち果すまで』

景資は旨を領して良弼を追拂つた。

時宗は益々西海の防備を固くして、蒙古來寇に備へた。一
 文永の八年も暮れ、九年も過ぎ、十年の曆も古りて、應て十一年の秋も老いた。我朝にあつては御宇多天皇御即位の事あつて、上下僅かに打寛ろいだ矢先に、忽然として蒙古の兵船が對馬に寄せた。

渚佗しき貝殻に宵の霜が降り初めると、十月の海の波が日に／＼高くなつて、吹き募る風に寢急ぐ漁夫の貧燈に、網繕ひの針の手さへ當ならず寒さを覺えて来る。——殊に本土を離れたる對馬の國へ打通ふ帆のかけも疎らな日頃、涯知らぬ雲の奥なる月も淋しく、海禽の羽音も暗い磯の番所へ配られた守護代宗助國の郎黨は、徒然の寒さを忘れて汲み合つた濁酒も盡きたので今は唯薄綿に包まつて寝れば事足る板戸の蔭にべき／＼と柴を折りつゝ、赤い焚火に手足を伸して埒もない世間話の花を咲せて居た。

「何と、吉内。此處の番所へ詰めてから久しうなるが、蒙古とやら天竺とやら氣もないは何としたちやい。お蔭で安々扶持米は戴けるぢやが、はて、寢ても起きても海鳴と千鳥の聲、いつそ飽々して了つた。稀には悠くり家へ戻つて、嬾左衛門侍べらせて二合半に酔うて見たいわ」

「ほんにその事、うせるなら早ううせろぢや。今度こそは二度と再び面出さぬほど豪い目に逢はせて呉れうにな」

「ちやが——待てよ。聞く處では蒙古とやらは豪い大國、船と船と繋いだら、それを橋に千里の外まで往來も出来るとの事ぢやで、いよく寄せたらこの島の一つ位蚤を捻るやうにもあらう。然うなつたらお互に斬死、嬾や子供ども什麼なるやら知れぬ。……俺は其處で勤考した。年一ばいで交代となつたりや、鎧も冑も金にかへて本土へ移る。そして田地畑でも買つて、生涯樂に暮さう

と……な

『ウハ、ハ、ハ、ハ、ハ。こりや面白い。皆も聞いたか。箒星で煙草を吸いつけるやうな話ぢや』

腹を抱へて轉け廻ると、先刻にからうとりくと居睡つて居た他の兩名が寢むたけな眼をしようぼつかせて

『何ぢや。兵六が一升買うとか』

と未だ足らぬかして肩を嘗めづる。

『そこ處かい。……此奴がく、蒙古が怖いで嬖や子供を連れて本土へ遁けると云ひくさる。それも宜いぢやが、鎧冑を金にかへて田地畑買うて一生を樂に暮す、……と悠うなのぢや』

『誰が、エ、それや何處の誰がぢや』

『此處に居る腰抜けの兵六がよ』

『ワハ、ハ、ハ、ハ、ハ。こりや堪らぬ。鎧の冑のと吐かして、汝が家には崩れ籠に缺け茶碗がごろく。澤山あるのは借錢に餓鬼ども、それで居て田地畑、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、夢ぢやろ、生れ變つた來世の夢ぢやろ』

皆に笑ひ卑されて、鼻白んだ兵六は、二度三度つるくと禿け上つた額を撫ぜて減らず口を叩いた。

『汝等は汝等、俺は俺ぢや。何とでも笑へ。いんまに蒙古が寄せて来て、汝等が首をチョン斬られるのを俺は高見の見物ぢやで……』

『兵六！ それ正氣で吐すか』

吉内は屹となつた。

『……宜う聞けよ。守護代様からのお達し、もう忘れたか？ 蒙古といへば外

國、同じ國のもの同士なら、勝つも負けるも運次第ぢやが、外國に負ける事はならぬ。負けたが最後、牛馬同然酷い目に逢はねばならぬ。と……天朝様さへ御心配なさると云ふ大事の瀬戸に、宜うもく高見の見物など、吐したな。サア、汝のやうな奴は戦の役にも立たぬ。この恩知らず奴、朋輩甲斐に俺が手にかけて息の音を止めて呉れる。左様思へ』

眞劔になつて、部屋の間へ轉がして置いた太刀を探る物騒な雲行。驚くまい事が、兵六はちりくと後へ退つて、酒の酔も一時に醒めた。

『謝罪る。……嘘ぢや。酒の上の輕口ぢや、堪へて呉れ』

この通りと掌を擦つて詫入る他愛なさに、一座は舊の睦まじさに戻つて、更なるも知らず語り續けた。

海は鳴る。風は募る。ピ、くと板戸洩る灯に慕ひ寄る千鳥の嘴さへ、置

きまさる霜の深きに戦くかとはばかり。

『どりや そろく寝るとしようか』

吉内ははたくと膝を拂つて、暗い土間から草履を穿いて番所の戸外へ出た。

文永十一年、後宇多帝の御宇十月中浣の夜。千断れ飛ぶ雲の袖に缺け初めた

月はありつ、霜の對馬の山も海も、一刷毛に塗り黒められて、濤の音ばかりが冠さるやうに潮木の梢に打騒いで居た。――此處の島人等は、過ぐる歳(六年三月)の騒ぎがあつて以來、只何となく蒙古と云ふ大きな異國があつて、島

も人、盗みに來ると油断なく考へて居たが、一年、二年、三年と歳經つ儘に、恐怖の念も薄らいで、忘るゝともなく防備を等閑に附するなかに、守護代宗助

國は鎌倉からの達しに基づき、春も秋も磯の廣きに番卒を配つて怪しき船を見る事もやと萬一の變に備へて居た。然し二千日餘近く交るゝ番所へ詰めさせ

られる郎黨の末々が、的のない火事に水を汲むやうな單調な任務に飽きるのも無理はない。内職の貝細工を濁酒に替へ、手慰みの賽を轉がしなぞして半季一年の交代の日を待ち明しながらも、守護代からの嚴達によつて、若し蒙古が押寄せたら、上下一列、女も男もこの島土に骨を埋めても皇國の爲に働かねばならぬと云ふ觀念だけは忘れなかつた。——吉内は「オ、寒む」と呟きながら、袴の裾をたくし上げて、憚かる人もない戸の外へ尿りながら、何の氣もなく沖の方を見た。

「ハテナ——、可怪しいぞ」

我を忘れて磯端の巖の上へ驅け上る楚音に、翅おさめた海禽がばたくと舞ひ立つた。

彼は溜風の吹きめぐる裡に停つて、身動きもせず沖を睨み詰めた。

（一〇） 禽獸に等しき慘虐

ぼつりく。

鬼灯子ほどの赤い火が、暗い波の遠くに幾つとなく連なつて居る。それも十や百ではない。見る／＼うちに現はれる怪しき火は、五百となり八百となり千ともなつた。

「幽かに波を越えて來る動搖めきさへ聞かれる。

「船だッ……」

舌も裂けるばかりに絶叫した彼の眼は鋭く殺氣を帯びて來た。燕のやうに身を翻すと、息せき切つて磯の番所へ驅け戻つた。

「皆來いやい。船だッ……船だ。蒙古の船が寄せて來たぞ」

「措け。冗戯けな」

兵六は又してもしや、いり出た。

「只だ今、此處で蒙古の噂したからつて、影繪見るやうにひよつこり遣つて奉
よらうかい、人の悪い。……真面目臭つて……」

「退込め、臍抜け奴！」

足をあけてはたと蹴轉がすと、うろ／＼して居る兩名の朋輩、肩先擱んで力
任せに引立てた。

「何をまご／＼。……お上役へ報知に飛べやい。小屋は狼火ちや。恠うするの
ぢや」

木枝を組んだ灯皿の油を疊に流して、槽の火を注すと一面の紅蓮！ 猛火！！

「早う走れ！ ぶち斬るぞい」

目前敵を控へし如く、彼は既に大劔の鞘拂ひして右手にさけ、燃えあがる番
小屋の火の揺れを脊にして、再び渚の巖の上へ躍り上つた。

碎鐘が鳴る、傳騎が飛ぶ、寢入りばなを驚かされた全島の民は、武士となく

町人となく、漁夫百姓の老若までが枕を蹴つて跳起きた。——澁難するにも風

の夜の海、迂かり船を漕ぎ出す事もならぬ。——行水の盟に浮きし木の葉に縋

る蟻に齊しき島民の運命は、袋の鼠、狙上の魚、見苦しく騒いだとて十重二十

重の敵の軍船の間を潜つて遁れ去る事は、人間業では及びもつかぬ。

「狼狽へな！ 女子供は焚出しせい。何の敵の奴等押上つたら叩き伏せろ」

法螺の貝を吹立て、手にく獲物を持つて集まる漁夫の群にも必死の色が

見えた。肌寒の寝衣の裾を踏み亂しつ、泣く子を脊に揺りながら竈の前に火

を吹く女房、林の奥や、藏の隅へ縮かまる老の嘆きも知らず顔に、心なき霜夜

の風は寒くく吹き募つた。

守護代宗助國は、注進を聞くと直ちにお城の太鼓をどん／＼と打込ませて、郎黨の出仕を促がした。

「對馬武士の骨を見するは今ぢや、禽獸に等しき彼奴等、如何やうな慘虐加へようも知れぬが、敵は異國ぢや。弱い音をあけてはならぬぞ。箭種の盡くるまで一步も退くな。武運が盡きたりや、この島の草木諸共焦土と化るのぢや」

鞍置く駒の嘶きにお城の大手を飛違ふ鎧武者、槍、太刀、薙刀押並べて犇めき騒ぐうちに、忽敦、洪茶立、劉復享を大將とせる元兵一萬五千、金方慶、金洗、金文庇を大將とせる高麗の勢八千、九百の戦艦堂々と海を壓して對馬の磯へ押寄せて來た。異様な鉦鼓を打鳴らし、舷を叩いて鯨波をつくる雲霞の敵が、百千の燈に波を照らしながら小舟に乗つて上陸しようとする處へ、箭の如

く漕ぎ進んだ一艘には、黒絲、小櫻、思ひ／＼の鎧をゆさと投げかけた武士十餘名が、槍を突つ立て勢ひ込んで居た。その案内の役を承はつたのが磯番小屋の吉内であつた、身分の軽い吉内は小具足を肌につけて白布を疊んで鉢巻を締めて居た。

「守護代宗助國殿よりの御使者ぞ。然るべき大將出逢はれい」

野太い聲を張上げて喚き立てたが、侮どり切つたる敵勢は齒牙にもかけず、却つて舷に灯をか、けて、冷笑惡罵した。見ると敵將と覺しき一人が白羽毛の冑して端近く立現はれ、覺束ない通商を介して無禮なる挨拶に及んだ。

「守護代より何用あつての使者ぞ」

「何川とは奇怪ぞ。汝等こそ戦艦を連ねての來意、何とある!? それにて申せ」
「改めて申す迄もない儀、蒙古大王の國書に答禮を致さぬ罪を咎めに參つた」

『その儀ならば一步たりとも陸の土を踏ます事罷り叶はぬ』

『踏まさぬとて、この儘に措かうか。束の間に亂雜骨灰ぢや』

云ひも終らず、右の船からも左の船からも、篠を束ねて投ぐるやうに射かける毒箭に、先づ吉内が胸を貫かれて海に墮ちた、使者の面々跳り上つて口惜しがつたが、見上げるやうな船の高きに槍も届かず、手を空うして漕ぎ戻らうとする後から、ド、ツと轟く火箭一發。立騒ぐ水煙の底に船も武士も一呑みに呑まれた。

元兵と高麗の兵とは、曉近く船を連ねて怒濤の如く上陸した。——陽に明き青旗赤旗、丹碧に塗り立てた戦艦からは火箭を送つて漁家を焼き立てる煙の下から、當るに任せて島民を虐殺する鬼のやうな將卒を迎へて、守護代助國は決死の郎黨を引具して縦横に奮戦したが、目にあまる敵の人波に揉み立てられて

散りくばら／＼、風に捲がる、霜葉のやうに討ち果されて助國も遂に壯烈な最期を遂げた。奥方も、公達も、自ら刃に伏して難に殉じた。百餘の武士が枕を並べて討死した後は、遮るものもなき村々家々。かけ干す稻に匿れ泣く里の娘はあられなき辱めを受け、これを支ふる老いたるものは膾のやうに斬り酷まれて徒らに枯れ行く草の根を肥した。

敵兵は守護代が居城にも押入つて、同じやうな狼藉を働いたのみか、懐劍を手に操を守る美しき侍女どもを無理からに縛り上げて戦艦に連れ戻つた。

涙の隙に打見やる島の其處此處、立のぼる怪の火の焔の渦は雲に連なつて、怖ろしの鬼どもに踏にじられたる嵐の跡の焦土の樹々に、黒き鳥が啼き飛んで居る。

『あ、情ない！このやうな憂目を見るなりや、死んで退けたい』

死なうにも儘ならぬ手の縛め。——侍女どもはよ、と泣いた。

（一一）戀づまに再三の使者

戦艦は錨を抜いた。

指願の間に横たはれる壹岐の島を侵さう爲であつた。

その血祭にあけらるべく、多くの侍女は鬼どもの手に引倒されて、生きながら兩の掌に穴をあけ太き帆綱を貫かれた。絶え入るばかりに泣き叫ぶ黒髪を手からんで、宙に上げ綱を貫した兩掌を舐に縛りつけて静々と船を進めた。世にこれ程の無惨な振舞があらうか。絶え入るさまに泣き細る侍女の唇からは腥い血がだらりと流れて、帯に小袖に縫ひこめし盡きぬ怨みを海禽が掠め

啼いた。

海は碧く、血は紅く、經も手向けぬ島人の屍が波のまにまに浮き流れる。

浦若い侍女の屍骸を舳に吊した戦艦は、忽にして壹岐の島へ押寄せた。守護代平經高は駒を進めて防戦したが力及ばず、残兵を率て城に籠つたが、盆上の卵は忽ち拳下に叩き割られて一族悉く自刃して果てた。掠奪、姦淫、百鬼夜行の暴狀を極めた彼等は、勝に乗じて肥前の沿海に寇して松浦黨と戦つたが、優秀の武器、擁せる敵は遮二無二押切つて筑前博多に上陸した。

これより義、太宰府では京師に急を報じ、九州の兵を徵めた。少貳入道覺惠その子景資、鎮西奉行大友頼泰、戸次重秀、菊地隆泰、赤星有隆等、須破とばかりに甲の緒を締め肥えたる駒の轡を並べて博多を指して土煙をあけた。——常ならば、脊中合せの誰彼も、この度は異國の敵と云ふに舊怨を捨て、隔ての

垣を解いて旗指物を建て連ねた。その勢凡そ十萬二千と注せられた。敵は毒箭鐵砲を打かけながら、今津、佐原、百道原、赤坂と進み、勿體なや箱崎の所に火をかけて附近の民家を焼き立てた。霜月も既に下浣、見る目、聞く耳朶、天地慘として悲風に哭する九州の一劃に、忌むべき敵の足跡を印せる將士の遺體は如何ばかりぞ。辛くも水城に籠つて寄せ来る敵と渡り合つたが、中にも少貳景資は陣頭に鎗箭を鳴らして敵將劉復享を眞逆様に射て落した。日も暮れぬ。敵兵は戦ひ疲れて一同船に引上げた。味方の陣にあつては、明日こそ一舉に雌雄を決する筈と觸れ廻して思ひ捨てたる別れの盃を呷つて居るうちに、初更過ぐる頃から一天俄かに掻き曇ると、ふわり／＼と飛んで居た千切れ雲が見る／＼空を吹き閉ぢて、星ひとつ無い漆の闇となつた。

『幸ひの闇、燭を滅して夜討をかけうぞ』

全陣奮ひ起つたが、刻一刻と高まつて行く嵐の海の波、遠きに纜を解く由もない。その夜すがら吼え狂うた海面に陽が白むと、不思議や九百餘の戦艦は影もない。斥候の船が歸つての注進によると、前宵の暴風雨に戦艦大破して退却したとの事。何は扱て先づ芽出度さと一隊の守護をとめて別れ／＼に領土へ戻つた。この變を文永の役と稱するのである。

洪茶も、忽教も、大破せる戦艦を率て蓬萊國を見捨てた。高麗の兵も歸り急いだ。然りながら彼等は何等かの土産なくして大王忽必烈に謁する事は出来ぬので、額を集めて密議の結果、壹岐對馬で掠奪した財寶を山と積ませ、據り處ない都合よき復命を舌に乗せて王城の奥に武威を誇つた。忽必烈は上々機嫌で敗殘の諸將と知らず過分な恩賞まで授けた。

『宜う仕て參つた。それ程に戀し置いたりや、倭國如何に我慢でも嘸な膽を縮

めたであらう。この機を外さず使者を送つて、貢の船を連ねさせうぞ』
 使者の役は杜世忠、何文著、都魯丁、嚮導として高麗の徐贊等、翌年（建治元年）花の彌生に美々しく船を飾り立て、我が蜻蛉洲へ帆を張つた。彼等の多くは洪茶、忽敦等の復命を小耳に挟んで、この度こそは倭國でも下へも措かず威服して奉答の書を渡すであらう。然うなつたら序の旅に、皇城の地から將軍の居城まで逡巡つて、異境の春の花に寢ようと、船路の憂も打忘れつ、室の津（長門の國）の朧の海に錨を沈めた。一行七十餘名、嚴めしい軍装でなく唐織錦の帯も豊かに、輝く冠、磨ける沓、悠々と上陸したので、土地役人は驚いて唐船到来の旨を太宰府へ知らす。室の津の櫻咲く日を又しても人の心は安からず動搖めいた。

『忽必烈大王の使者、答書受取りの爲に來著、太宰府へ罷り通る』

その口上を次ぎ／＼に傳騎が齎らすと、兎も角も案内せとの下知によつて、途中の警護嚴重に杜世忠等は太宰府へ向つた。
 山も靜かに彌生の霞立ちこむる國原かけて、黄金花菜に風暮る、うね／＼川。異國の使者を見ようとす沿道の士民が、警護の武士を憚かつて小腰を屈める光景に、彼等はわが身を崇めての儀と阿呆らしう肩聳かして打通つた。
 太宰府の人々も、素氣なうは遇らはなかつた——鎌倉から下知のあるまで——磯の館を打淨めて留め置いたが、前年の來寇一族を喪ひたる九州武士の鐵腸は、積る怨みと煮えかへつて怖い眼に不祥の客の言動を監視して居た。
 太宰府からの急使が鎌倉に著くと、幕府の重臣は打揃ふて執權時宗の臨席を待つた。

『懲りづまの奴輩、ばつ返せ』

と云ひ張るもあれば

「此方より事を構ふるは上策でない。口實を設けて只何となく去なする工夫が専らや」

と溫和しう智者振るもある。

勾欄に櫻吹雪が通ひそめて、高殿の甕の空に圓かな春の月が浮んだ。執權御前の協議と云ふが右に左に立岐れて、いく度か燭の油が注がれながらこれと定まる氣勢もない。

「この上は……御指揮を」

一同が膝を正して、時宗を仰ぐと、豊頬美髯の剛氣な執權は、この時初めて重々しく唇を開いた。

「太宰府に留めある使者ども、残らず呼び上せい」

何とする氣か、時宗は内庭の花のかつ散るさまに眼をうつして、心にもかかぬ風情であつた。

《一二》 誰か知る大鳳の志

「執權殿の意中、呑込めぬ。己で逢はれうとか」

「何の、逢はれうとて杞憂のあらうか。彼の殿の腹のどん底、大磐石ぢや」

下馬評に日の経るうちも、時宗は平然として變る事なく執權の責務を果し、その日／＼に著到する傳騎によつて

「元使一行、某の地へ一泊」

との上申を軽く肯いて聞流して居た。日数は経つた。花の雨が降つては晴れ

た。やがて時鳥も聞かるべき宵空かけて、鎌倉山の逝く春の光は今日も亦恙な
くなよかに薄れた。——堪りかねて重臣北條實政は拜謁を願ひ出た。

時宗は館の奥の廣縁に、只ひとり小性の酌に浴みの後の盃をあけて居たが

「構ひない。此處へ召連れい」

と快けな頬の醉を撫でた。圓柱幾つか潜つて、實政は端近う坐を占めた。

「散り惜しむ花の風情、一しほぢや。一盞相手をせまいか」

時宗は笑ましげに實政を顧みて盃を干した。

「ハ、御意。……なれど今宵はちと改まつての御内意伺ひたうて推參、お盃は

その後にて」

「何事か喃」

空にした盃を下に置いて、のらりと此方へ身に向けた大兵肥滿の胸から膝へ

素絹無紋の袖が靡いて、凍と締めたる元結の白きに、髪黒きが鮮かに榮えた。

「太宰府より召し寄せられまいた元使、やがて到著とも御座りませうに、その

處置どもの御沙汰は……」

「諾。それ改めて訊ねうでか」

「御心の底と云ふを承はり置きたう存じて」

「その儀なりや、既に心は極つてある」

「極つたとは、什麼極らせて」

「實政！御許もわれ等も、神國の民、それ辨へたりや元使の處置ども二つあら

うか。われ等執るべき道は只ひとつぢや」

『は』

實政は時宗の威に打たれて、膝に措いた掌を疊に滑らせた。

「武門武士の弓箭抑も何の爲か。畏くも禁廷御恩命を擔うて執權たるわれ等、皇土守備、若し國難ともあらば一族一門、民も草木も有る限りを盡して御奉公の忠を勵む。……大國ともあれ、國を窺ふ蒙古王より重ねての使者……斬るぢや。梟首する分ぢや」

颯々たる時宗の姿を仰いで、實政の顔には包み切れぬ欣びの色が輝いた。

「扱こそ、御腹中下拙推量に違はで御座つた。この上の欣びもなう……然らば到著の上は御前に曳かせて」

「否、その儀には及ばぬ。逢うたとて所詮は答書呉れとあらう。一系の天子、その御思召を鑑うてあるわれ等、禽獸の輩を誅するに手を下すまでもない。然るべく計らはれい」

「承はり申した。下拙これより退出、待ち受けての方々に御意傳へ申したり

や、奈何ばかり勇む事で御座らうか」

「要談はそれ迄か……一蓋いかぬか」

朱に塗られた盃は、實政の手に受けられた。

「神國の武威これによつて彌榮えつらうなれど、世には膽の小さい輩在して、蒙古來寇を憚かり居る氣」

「ホ、ウ。さすれば、元使を斬るを惡しい方策とでも批判してか」

「眞實、彼等申する所では、徒らに武威を重んじて、敵に備ふる道を怠る、宜き大將のせぬ事なぞと私語致すやに聞きまいた」

「敵に備ふる道とか!……ワハ、ハ、ハ、ハ、」

時宗は口髯を揺つて哄笑した。

「然もあらうわ。元の大國たるをのみ憚かつて、己が太刀の錆びを忘る、。そ

れしきの頼母しからぬ奴輩が目に、時宗が膽を見る光があらうか。フ、笑止

小性は紫の袖を疊んで、燭の灯を剪つた。時宗の頬は柿のやうに赤く、一文字の厚い眉はむくくと蠢いた。

「不肖ともあれ、一天萬乗の大君より執權の職承はる時宗、成算無うして元使を斬らうか！ 實政々々、近う寄れ。見すものがある」

それと小性に目で知らせて、秘藏の宝箱を取寄せると、手づから紫の紐を捌いて、一冊の奉書綴りと一葉の圖面とを取出して實政に手渡した。

「篤と見い。われ等元使を斬る存念。自から明白とならう」

實政は浅く酔うたる腫を凝らして先づその圖面を睨み廻すと、我を忘れて聲を擧げた。

「ヤ、何としてこれ程にお目が届いた。元、高麗、わが神國への船路までが手に取るやうぢや。何時の間に……何として」

唯呆れに呆れ顔なる實政を凝と視て、時宗は會心の笑を禁じ得なかつた。

「兼てより密かに鎌倉へ呼上げ置いたる彼地の流人、利を喰はせて飼ひ肥えさせたは何の爲か。……われ等この館の奥にあつても、耳となり目となつて日本は愚か唐土の涯に心を配る間諜のものさわに有る。……それなる書冊を見い。彼我軍勢の比較、船艦の數、自らわれ等無謀に使者を斬らぬ存意も判らう」

實政は嬉し涙を滴さぬばかりに打欣んで額を擦つた。

「これまでの御配慮、露知らぬで差越しての推参面目も御座らぬ。お赦されて……畢竟は神國の守護それが目的、怖る、所もない」

「否、一圖に左様はないぞ。元に比べたりや掌の上の豆、無残と濁まれぬだけ

の精がなくては叶はぬ。士農工商押なべて國に殉する覺悟が肝要ぢや。……この上にも油断せまい。御許もその心して西國へ間諜のもの遣りやれ。磯に住む漁夫、難船の身を高麗唐土へ遁れた覺えあるものを呼び上ぐる。見た儘、聞いた儘の口上、それ等聽て出帥の嚮導ともならうぞ』

『出帥……との御意は』

『時宗が一代の面晴れ、是非に一度は彼地に船を寄せて忽必烈の甲を脱がするその折にこそ御許は先陣、今から槍太刀磨いで置かうぞ』

太き眉、輝く眼、紅を溶いたる唇に漆黒の髯を吹きつ、熱盃を啜る時宗が意氣の前には、天魔も、夜叉も、落葉の如く舞ひ散らうかと思はれた。

小性が燭をかき立てると、時宗は莞爾として盃を重ねて酔うた。

『散るわく。夜櫻の散るさまよ。……元の軍船打寄せたりや、慙うもあらう』

か』

つと起つて庭の面に降り立つと、花散る雪の白きを踏みつ、高らかに朗詠の如く、一くさりを唄ひ興じた。

（一三） 元使一行の鼻首

杜世忠等元使一行は、我から良にかゝるとは知らぬ氣易さ。泊りくくの警護の箒を現心に眺めながらに、難波津や東下りの途中まで來ると、鎌倉からの下知を奉じて嚴めしき數十騎が風の如くに到着した。

太宰府からの送りし武士列座して、通詞を仲に申渡す執權時宗からの口上は次の如くであつた。

『不埒僭上なる元使の奴輩、禮を以て迎ふるに及ばぬ。罪囚として鎌倉へ引立つるやう。異儀申張るに於ては縛し上ぐるぞ。確と心得』

杜世忠は元より、何文著も、都魯丁も案に相違の怒を發して、冠の紐も斷るるばかりに逆轉を戦がせた。

『罪囚とは何事。苟くも大元國王の使者たるわれ等、指一本さして見よ。時宗とやらその儘には差置かぬぞ』

喚き立てたが甲斐もなかつた。元使附添の將士も、一旦は勢ひ込んで刀の鐔を鳴らしたが、隙間もなく槍の穂向けたる鎌倉武士に睨まれてのめくと首を縮めた。

「啞くことあらば白洲で啞け。われ等は執權の命によつて汝等を引立つる迄ぢや」

否とあらば腕にかけて。——幾千里外の旅の空、敵の手中に落ちたる彼等は姐上に鯉の膽を誇る俠骨が無かつた。

掌返す冷遇に泣けばとて、怨めばとて、昨日までの塗の輿物、今朝は穢なき網代と變つて、綿柔らかき褥を剥いだる膝も露はに蕙敷いたる夜々の泊り。

夏も名淺の螢火を悲しみながら、觀念の眼を閉ぢて、居れど、いつらくと胸に湧く在りし世のふる里の事。——いつしかに天龍の川も打越え、小夜の中山泣く／＼に途を急げば、やがて長者が奥庭に興搔き据ゑると、涼しき縁に葦織の蓑蔭の敷物を振舞はれて、暫しがほどの寛きを許された。

『われ等、鎌倉とやらに着いたりや、什麼なるであらうぞ』

『せめては今一度、故郷の空仰ぎたいものぢや』

互に低聲に囁きながら、力なき瞳にじろ／＼と眺めやる葉山の雲に、赤く赤

く残照の匂ひうすれて、蜩の聲のみが肌沁みるやうに淋しく聞える。粹置くほどの不淨人とはなれば、長者が情の一碗の茶を甘露とばかり啜りながら、精も力も抜け果てた味気なき顔を見合せてはつとばかりに溜息を吐いた。日が暮れて灯が運ばれる頃、一同はいぶせき庭に行水して僅かに汗の香を忘れ、悵然として柱に靠れて居た。ころ／＼と蛙が啼き残る。ちらくと宵の星が瞬く。草の葉に湧く闇の淺きが、心消え入るばかりであつた。——明日をも頼めぬわが身の憂さを、かこち顔なる蟲の音に袖絞ればとて、隔て盡せる遠き都に立かへるべき術もなきに。

故郷や奈何に。

妻子や奈何に。

夜は徒らに更けて、細うなり行く燭のまに／＼綿々として追慕の情が胸を塞

ぐ、里の童の吹くやうな篠笛の消えたるあとは、河瀬の音の淋しさを増すばかりである。

敵ながら。——憎むべき敵ながら。——若しわが國の使者が唐土の敵陣に使用して斯る窮地に落ちたとしたら什麼であらう。國と國との争ひに死する意氣の有無を別として、一個の人、一家の主、膝に跪る子、袖を控へる妻と別る、愛情の涙ある有情の人の運命を、誰か哀れと思はざるものぞ。

然あれ、國外に使ひして君命を辱めざるの節義の尊さ。——彼等にはその膽が無かつた。唯々わが身の上のみ嘆きつ、樹々の秋禽啼くを愁へて恨を異邦に曝したのであつた。誰を怨む事もない。——心柄である。

鎌倉近くなるまゝに、沿道に見物の群衆が垣を築いた。残る暑さに笠冠る武士の眼は光つて、土に膝突く農民の口の端にさへ、事可笑しやと噓し立てられ

た。

『處刑は明日ぞ。假の館に繋ぎ置かうぞ』

下知によつて元使一行は粗末な館の暗がり一夜を明した。翌くる曉。北條實政は執權時宗の旨を受けて元使を白洲へ引据ゑて無禮を詰り、首級打つて梟すべき旨を申聞けた。

彼等は云ひ甲斐なくはら／＼と涙をこぼして、

『答書遣はされぬとあらば、その口上土産にして歸國を許されい』

『われ等は主命によつて使ひせるもの、首級打たる、は無残ぢや』

と恥を知らぬ慈悲を乞ふたが、元より許さるべき筋でないから使者五各はその場から後手に繩打たれて龍の口の刑場へ引出された。

『それ、元使が曳かれて行くぞ』

『神國を掠めようとする不敵な奴等。小氣味よい死態見ようぞ』

磔を擱んで打つけるもの、脣尖らせて唾吐きかくるもの、武士も町人もぞろぞろと裾埃らせながら、われ勝ちに跟き従ふて来る。——小松がくれに幔幕を絞れる檢座、渚の風に鳥騒ぐ砂地つゞきに敷き並べたる五枚の薙に、一個々々水手桶が備へてあつた。——杜世忠の蒼さびた頬には、無念の涙が流れて居た何文著の眼は血走つて居た。重立ちたる使者五名は、死を怖る、足もふら／＼人の見る眼も構ひなく遅々として瀆砂を踏んだ。

『其處へ直れ』

繩尻取つたる侍に押据ゑられる後には、腕に覺えの劊手が、ぎらり／＼と大劊の鞘を拂つて身構へた。群衆は鳴を鎮めたと松が枝を吹く初秋の風が颯々と襟に落ちる。遁れぬ所、彼等も遂に觀念の臍を固めて、曳かれもの、小唄に

泣いた。

「この怨やがて倭國に崇りする折りがあらうぞ」

「われ等最期を笑ふた眼に、元の軍船を見る折りがあらうぞ」

云はせも果てず振おろす劔の下。五個の首級は砂に塗れて、高札打つたる濱の近くに梟けられた。使者に随うて來た六十餘名も、その日のうちに斬り放されて、無縁の塚の冷たい土に醜き死體は匿されて了つた。

《一四》 蒙古征伐の軍令

「やれ、はれ、小氣味の宜い事喃」

「したが、この沙汰元國へ聞えたら、無事には済むまい」

「船を連ねて寄せるは定ぢやが、怖る、事はない。執權殿巨い目で睨んで御座らしやる」

「ほんに喃。それでこそ高枕、易々と世が渡れるぢや」

散りぐくに人垣のほぐれ去んだ後の鎌倉は、常と變らず静かな夜となつて、寺々の鐘、町家の灯、寄ると障ると執權時宗を嘆美する聲のみが高まつた。時宗は元使處刑の濟んだる其夜、政村實政はじめ宗徒の面々を館に招いて、心祝ひの盃を廻らした。

「御許等、今宵の酒宴、何と思ふぞ」

はて異な事と一座は小首を傾けた。そのなかに政村は霜を交ぜたる髻を弄ぐりながら肩を揺つた。

「以上なう芽出度い酒宴。無禮の元使を討果いて鎌倉の武威を示す……とでは

御座らいでか』

「如何さま、面晴れの盃、胸開いて頂き申した」
左右のものが相槌を打つた。

「それだけか!」

時宗は興醒めたらしく呟やいた。一顰一笑、如何なる場合にも喜怒哀樂を假初に現はさぬ時宗が、この芽出度き酒宴の席に相應はしからぬ不興の體に、先づは各れも息の詰まるやうな心苦しさを味はうた。

「それだけとは……守殿、解せぬ御意。折角のお盃も咽喉に塞る。ちやつと打明けてお叱りとも、お指圖とも有りたうお座る」

實政は肩を喰ひ反して、衣紋を掻き合せた。時宗は押黙つて肯いたが稍暫らくして言葉を繼いだ。

「今宵、御許等を招いたは一命申し受けう爲ぢや」

「エ、一命と……」

「何時なりと召させ。改めて承はる迄もない」

「差當つて一門一族、命を捨てさ濟まぬほどの儀、何と御座るぢやて」

苟くも一城一國を預かる武門の歴々、酒の肴の折敷に、匕首を配られても怯ともすまじき面構へ殺氣を帯びて詰寄する膝頭に、盃の酒は流れ、折昆布もこぼれ散つた。

「すりや、軀も心も時宗に呉る、ぢや喃」

「御念には及ばぬ」

異口同音に肚の底から潔き武者聲が迸しつた。

「忝ない。それ聞いて國土は安康。戦は捷ぢや」

『戦とは……』

『……はて、氣疎い。龍の口に梟けたる首、あれは何處のものぢや』

知れ切つた事に智者者ぶる。——心憎しと口を噤むものもあつた。

『彼の梟首こそ蒙古へ火蓋を切つた印。必忽烈が面上へ唾を吐きかけたと同然

……戦は今日からぢや。……今宵の酒宴、出陣の首途を祝ふての心ぢや。……

その頼母しき酒宴の引出に、御許等が一命着として申し受くる。われ等この上

の歡びはない。……戦は捷ぢや。御許等が膽の赤いを、蒙古の奴輩に嘗らせ

てやるも遠くはあるまい。……皇國の興廢は御許等が弓箭に賭けられてある。

今から應戦の用意怠るまいぞ』

座中は膝を打つて感嘆した。

『まこと。それ程の大事を忘れて、只々酒の香に酔うてあつた。面目もお座ら

ぬ

實政が詫びれば他のものも恐縮した。陣立その他は追ての沙汰、その存念だ
け心に置けば他の論議の要はない。

『寛いで、盃舉げられ、われ等も夜すがら吸み明さうで』

時宗は浴びる如くに大盃を吸ふた。

諸國大名へは鎌倉から使者が向うて、蒙古來寇に對する出陣の用意が傳へら
れた。

鎌倉から京師禁廷へ元使誅戮の一條を奏上すると、心狭き公卿のうちには

『時宗が無法から、國難を早めるやうの事あつては』

なぞと色を喪ふものもあつた。禁廷からその儀に就てのお訊ねもあつたが、

時宗は

「いつまで捨置かせられたでは埒明き申さぬ。日の本に鎧著る男の子ある限り屍を積んでも外寇に備へ申すで、殿上の方々には心易う思召されて宜しからう」

と斷々乎として國難に處すべき總ての計畫を急がしめた。

京師大藩の諸大名は、續々として九州に西下した。太宰府の水城の修復も出来た。霜月に入つては北條實政が時宗の名代として太宰府に下り、師走初旬雷鳴の如き痛快な軍令が西海防備の陣屋々々を驚かせた。

明春三月、蒙古征伐の首途仰せ出されたに就ては、軍船兵糧の用意十分致し置かる、やうに。

この破天荒の計畫には、九州の諸大名も肚膽を抜かれた。執權時宗の人物を偉大とは承知して居たが、幾百倍とも知れ難き大國へ船を寄せて征伐とは扱も

扱も膽の太さ。面白い乗出せと力むもあれば、危険いと二の歩を踏むもある。

潮風凍る西海の渚つゞきに陣屋打つたる篝火に群る、將士が、甲論乙駁、色めき立つて居るなかへ、時宗の命を含んだ有名の猛者どもが郎黨召し具し、旗指物を打靡けつ、鎌倉から下つて來た。

（一五）西海將士の意氣

時宗は豫じめ諸大名の杞憂を解くべき方便を講じて置いた。それは多年心にかけて調べ上げた蒙古の國情、海陸の兵力等を説き並べて、一々これを諸大名の許へ傳へしめたから、徒らに蒙古の大國と云ふを頭に置いて怖氣づいて居た面々も

『これいきの敵ならば恐るゝには足らぬ。來寇に先んじて征伐するが上乘ちや』

と勇み立つと共に、時宗がこれ程までに敵情を探り置いた神算に舌を捲いて畏敬した。——時宗の命を含んで西下した猛者達は、諸大名の陣屋々々を繞り歩いて

『熊野の漁夫は鯨を突くぞ、大國が何で怖い。……一正の虎の爪は千正の羊を裂く。蒙古王を手擒りにするは瞬く暇ぢや』

と喚き歩いたので、雲霞の勢は日に／＼活氣づいて、不知火の怪し火ならぬ篝の数は波も爛れるばかりに夜空に映つた。

山陰山陽兩道の諸大名は、船手を承はつて氷雨降る海路の冬を乗切つて九州へ兵船を廻す陸奥の涯からも、越路からも、兵糧を送り次ぐ驛路の鈴が、西へ

西へと鳴り續いた。

時宗は鎌倉の館の奥にあつて、會心の笑を洩らしつゝ、地圖を按じて花咲く春の日を待つた。——その年も暮れて、建治二年となつた。——靜かなる世の正月ならば、門松立て、屠蘇も汲まうに、騒がしき國難を控へての津々浦々は戸毎に餅搗く臼を減らして、俵の米を獻上の車に積む、如月となり、彌生となつて、いざ出陣の間際になると、不幸にも海荒れが續いたのみか、陣中に悪病が流行したので折角の計畫も暫らく延期せねばならなかつた。皐月の菖蒲、六月となつても甘露の日和がめぐつて來ぬ。悪病は益々募る、時宗は地團駄踏んで口惜しがつたが、人の力で何とする事もならぬ。延び／＼に日を過ぐすうちに遂に一旦見合せとなつて、陣屋々々はその儘ながら、軍船兵數夥しき刻と黄金を費して筑前の沿岸に石壘を築かした。その最中に又もや周福、樂忠等の

元使が忽必烈の書を捧じて太宰府へ來た。

この報に接せる時宗は、言下に『斬れ』と命じたので、手具脛引いて待構へた西海の將士は直ちに博多の濱へ曳出して、一人も剩さず首を刎ねた。

『これ程に面皮を剥いたらこの度こそは軍勢を差向くるに違ない。力瘤の抜けぬうちに、一合戦したいものぢや』

久しく陣中の無聊に飽いた將士は、周福等の最期の悲鳴に睡い目を醒して、太刀の枕の夢を捨てた。

十月には關東から大兵が九州へ下つた。

翌三年十月には西海四國の將士が博多に集まつた。山陰山陽兩道の兵は京師の守護、東山北陸兩道の勢は敦賀を固めた。

弘安四年になると、近く蒙古の大軍が押寄せるとの報が國中へ擴がつた。須

破一大事と聳めき騒ぐ庶民に對して、鎌倉幕府の執權北條時宗の名を以て、次の如く檄文を觸れしめた。

『この度の一戦こそ國家の運命の定まる大事である。苟くも皇土の民と生れて君國の之恩に浴せるものは非常の覺悟をせねばならぬ。軍に従ふものは身命を抛つて敵に當り、家に留まるものは冗費を節して軍資に獻するようにな。……われ等の祖先は嘗て三韓を征服して國威を海外に輝かせられた。今若し蠻賊の爲に辱めを蒙るやうの事があつたら、何の面目があつて祖先の靈に見えようぞ。この國難に際しては上下一致、必捷を期さねばならぬ』

若し戦ひに打負けて、外敵に踏荒さるゝの苦は深く國民の膽に銘じた。是非とも捷たねばならぬと老幼にして從軍を願ひ出づるもの。無理にも捷つて貰はねばならぬと軍馬兵糧を獻するもの。百里、二百里は愚か、勿來の關の彼方か

らも水盃の別れを告げて乗出して来るものが引も切らぬ程であつた。

この時、佐渡流謫の日蓮は赦されて本土へ戻り、眞葛佗しき行脚の草鞋を、甲州身延の山に解いて、擔ます能かず法華經の功德を説いて居た。——鎌倉にある日蓮の歸依者法弟等は、國土を擧げて蒙古來寇の噂に騒めき立てるのを見ると、それ見た事かと云はぬばかりに手を叩いて嘲り笑つた。

『今になつて騒ぎ立て、も十日の菊ぢや。われ等が上人様は、とうの昔にその事を説かせられたに。……泥棒をみて繩を探す醜い態は、取も直さず法華經を輕んじたからぢや』

この嘲笑の聲は何時しか身延の日蓮が耳にも聞えた。日蓮は法衣の膝にはらはらと涙をこぼした。

『さりとは心なき人々ぢや。讒法の咎とはあらうも、それは今更返らぬ事。』

……この期に及んで國難をよそ目に見るは國を忘る、不臣の惡業。……日蓮はそのやうの不覺人を造つては置かぬ。……法華經の有難きを説く口に、そのやうな端たなき舌動かすものは好ましくない。重ねて路傍に蒙古の妙汰を語るものは、師弟の縁を斷たう迄ぞ』

と廻文を認めて、これを鎌倉の弟子中へ差送つた。この顛末も亦時宗の知る處となつた。

『殊勝なる高僧の處置、眞似難き處ぢや。この上は日蓮が法力によつて、蒙古調伏の旗曼荼羅を乞ひ受けよう。幸ひ近く將軍家（惟康親王）御西下の先陣たる貞綱、彼を身延へ……』

夜中ながら召出された宇都宮貞綱は、承はつて曉近く鎌倉を後に身延へ向つた。早くもそれと聞知つた日蓮歸依の諸大名は、我もくと種々の土産を指し

て多くの下僕を従はしめた。——泊りくくの夢も短かく、水鶏に朝を急かれつ途を急いで、九十九折る身延の奥へ分け登ると、日蓮は粗末な法衣を著て、山冷迫る庵の門に停んで居た。

（一六） 石清水の御参籠

「遙々の御使者大儀。……この度は先陣の大將承はられた氣、御苦勞に存ずる」
日蓮はさらりと珠數を揉みながら、懇ろに出で迎へた。貞綱は世にも審かしき面持で

「御坊には、何として拙者参向の儀お知り召された」

と訊ねた。後に隨がふた面々も一圖に日蓮の顔を仰いだ。

「日蓮法力によつて夙に存知、これにてお待ち申してあつた。いざ此方へ入らせ」

と夏草深き縁の石に草履を脱いで庵のうちに座を占めた。白木の机、經文、佛像、身のまはりの調度とは數ふるほどにもない簡素な光景をみると、貞綱は大徳の潔き心に感じて襟正さる、思ひであつた。

浮雲の下に重なる山々の縁を吹いて、高嶺の風は涯知らず涼しかった。遊茶一服。貞綱は言葉静かに時宗の申し條を傳へた。

「御坊護念の力を借り、大曼荼羅頂いて筑紫の濱へ馳せ下りたう存ずる。偏にお筆を執らせられい」

「承はり申した。速かに認めて進ませます」

長さ六尺五寸、幅五尺五寸、兩國には日月、四方には四天王、八大龍王を畫

いた大族に向つて、日蓮は法華經を唱へながら大曼荼羅を書いて、祈禱を籠めて貞綱に授けた。貞綱は鎌倉の諸大名から托された数々の土産を残して山を下つた。

元の將忻都、洪奈立、高麗の將金方慶、朴球、金周鼎等は兵船九百艘軍四萬を率ゐて壹岐對馬へ押寄せた。島民を殺す事草を薙ぐが如く、有る限りの暴虐を働いたので我軍も直にこれに驅け合せたが、怒濤の如き敵陣の猛威に呑まれて、少貳資時が眞先に討死すると、暗きに紛れて四散した。これに氣を得た蒙古の船は、潮を突いて筑前の志賀の島へ押寄せた。

この大軍に備へん爲、太宰府に驅せ集まつた面々は少貳覺惠、其子景資、大友貞親、菊地武房、赤星有隆、葉室高善、龍造寺季時、原田種元、大村澄宗等鎌倉から下向した秋田盛宗の指揮を待つて石壁に兵を配り、鯨波を造つて挑み

かけたが、敵も容易に岸へは寄せず、志賀の島波廣々と船を浮べて星照る風に數千の灯を揺つて居た。

『日本軍には船が足らぬ。夜襲など出来るものか』

壹岐對馬の捷ち戦に味を占めた元軍の將士は、鎧を解いてゆるくと船上に寝た。その油断に乗じて草野七郎經長は密かに決死の郎黨を選つて漁船に乗り雲間に月の匿れるのを待つて、人にも告げず漕ぎ出した。海は暗く風は凩いだ。櫓拍子も忍びやかに見上げるやうな敵船の脇腹へ漕ぎつけたが、見張のものも眠りこけてか、咎めるものもないを幸ひ、それとばかりに繩梯子を投げかけ、猿の如く船中へ躍り込む物音に驚き騒ぐ數百の敵の中へ七郎經長眞先に斬つて入つた。

『敵を選むな。當るに任せて斬つて落せ』

應と喚いて左に右に斬り廻る太刀風に、見る／＼屍の山を積んだ。

『深入して不覺をとるな。退け』

手に／＼首級を引揃んで蝗の如く漁船へ飛ぶと、毒箭石弩雨と降るなかを潜つて無事に岸邊に漕ぎ戻つた。この夜襲の功名首二十一級。軍神の血祭りとして各陣にはエイオーエイの勝鬨が起つた。

幕將秋田盛宗は、草野七郎に感状を與へ奇功を賞したので、有る限りの將士は我も／＼と功名手柄を心がけ、敵や寄すると渚の風に駒を並べて血眼に海上を睨んだ。

筑紫の濱の風は腥く、玄海の濤も高鳴るこの頃の京師は、埒もなき流言に安き心もなき状態であつた。

『蒙古の勢は筑紫の濱の固めを破つて長門の浦へ向つたさうな。鑿て京師へ攻

め上るとやら』

若しその様の事あつたら。—— 驗も合はで怖ろしき夜を籠る町家の恐怖に釣り込まれた殿上人までが

『關東より兵を召して京師を衛らせ、二上皇を奉じて難を東國に避けようではないか』

と私議して、後深草龜山兩上皇の簾前にこの旨奏上するものさへ出來たが有繫に神の御胤たる龜山上皇はお耳にもかけさせられなかつた。

『國を擧げて奉公の忠を勵むに、朕ひとり安きを希ふは帝王の道でない。……石清水の社に詣で、神祖の加護に縋らうするぞ』

階高き石清水の神の御前に、畏くも玉の御杵を運ばせられ、一晝夜の久しきにわたつて供御も召されず祈願を籠むる參籠の勿體なさ。—— 幣の白きを繞

りて鳴る納め神樂の鈴の音に群臣の額は垂れつ、鳥居の空に有明の月が消えた。——更に又伊勢神廟へ權大納言藤原經任を使せしめ、御宸筆の願文を捧げ、龍體の尊きを以て國難に替らんとまで仰せ出された。

傳へ聞く民草の葉は涙に濡れた。

六波羅の兵を率ゐて西下の準備を整へて居た時宗は、涙ながらに一軍の將士に觸れしめた。

『上皇の尊きに在しても斯くまでの御憂慮、畏しとも勿體なきお沙汰である。

われ等臣列にあるもの、命ひとつ捨つるばかりで御奉公は果てぬ。誓つて外奴を討懲して宸襟を安じ奉つらねばならぬ』

宇都宮貞綱は、將軍の先陣として日蓮に乞ひ受けたる大曼荼羅の旗押建て、九州に下つた。

〔十七〕 玄海灘の日本晴

七月になると、更に元將范文虎は兵船三千五百艘に十萬の兵を乗せて能古志賀の二島に寄せた。忻都、洪奈立の軍もこれに加はつて、肥筑の海は敵の船を以て埋められた。

有明の濱に陣を立てた河野通有は、伯父通時と牒し合せて三艘の葉舟に潛み眼にあまる敵船を事ともせず、一際目立つ巨船の不意を襲ふた。早くもそれと心づいた敵勢は、碎けよとばかり石弩を射かけたが、剛勇の通有通時事ともせず、轡を傾けて死ねや〜と漕ぎつけさま

『帆柱を倒しかけて足場を造れ』

と號令しつゝ、撞とばかりに打倒した帆柱を傳ふて、飛鳥の如く船中に紊れ込んで、血飛沫のなかに太刀槍を閃めかせた。

この時敵の大將と見ゆる一人は、逆髻を戦がせながら朱房ついたる槍取のべて味方の士を突き捲くる非凡の手續に、必死の面々たち／＼と路を開くると見た通有は

『小賢しき振舞喃、動くな』

と吼えながら、血染の業物眼にもとまらず槍のけら首斬り放して、たちろぐ隙をえいやとその場に打倒して足下に組敷いた。

『この船の大將を河野通有が牛擒つたぞ』

帶際掴んで眼よりも高く差上げ、毬の如くに自分の乗つて来た小舟のなかへ投げ込んだ。勇將のもとに弱卒なく、恥を知る武士の手に／＼敵の首級が六十

あまり掴まれると、通有通時の下知によつて、二艘の小舟は追ひ討つ敵を扱ひ乍ら箭の如く岸へ引戻された。

打續く夜討ちに敵も膽を消した。

范文虎は各船の大將を呼集へて評議を開いた。

『一先づ彼れなる島影へ退いて兵船を整へ、盛返して一攻めに攻め上らう』

それこそ宜けれと思ひ／＼に錨を抜いて、肥前鷹島の蔭まで船を退けた。

日蓮が祈禱をこめて認めた怨敵調伏の旗曼荼羅は筑前の濱風にひら／＼と押建てられた。

漁火の影さへ絶えたる鷹島の沖の空に、夏の宵月光を収めて、そよ／＼と吹き来る風に鏝めし軍船の灯は、夜光るてふ羽蟲の群を見るやうであつた。

『怪しい海鳴りの聞ゆるぞ。船と船を繋ぐ事忘るゝな』

范文虎の下知によつて、數千艘の敵船は、鐵鎖を渡して犇々と繋ぎ合され

た。
弘安四年六月三十日の夜。

といろ／＼と鳴り高まつた海面に、白馬の如き濤ばしらが寄せ躍ると見る間に、黒土を以て塗り立てたやうな暗い空から閃々たる稻妻が雷鳴を誘ふて、凄まじき魔風は鷹島を吹き崩さんばかりに猛雨が注いだ。

『神風ぢや』

『暴風雨ぢや』

陸に在つたる我軍の將士は、陣屋々々の吹き倒さるゝをも忘れて、濱に集うて雀躍した。

沖にかゝりし軍船の灯は跡もなく消えて、吹き募る風雨の遠くに、幾萬人の

生靈が波に呑まるゝ、斷末魔の悲鳴が聞えるやうであつた。

雨よ降れ。

風よ募れ。

神が造りし蜻蛉洲を窺ふ外夷の船も兵も、千尋の海の底に沈めよ。

神風は七月朔日の夜まで續いた。

漸やくにして雨も靜かに、沖明りする海原に浮びし破船の數は三千。空しく海の藻屑となりし敵兵は十萬を越えた。

僅かに鷹島の巖根に縋つて辛くも九死に一生を得たるもの六千餘あつたが、少貳景資押寄せて斬散らし、降人一千名は多々良の濱に曳出して茄子の如くに首を刎ねた。

嬉しや、玄海灘の日本晴。

凱歌を奏して陣を解く諸大名は、皇威かしこき神風の徳を唱へつゝ、過分の恩賞を土産に郷土に歸つた。

主上、禁廷のお欣ばせは申す迄もない。

時宗は厚く將士の勞を謝し、日蓮にも使者を立て、法華經の功德を感謝した。

必忽烈の夢や奈何に。

神州の山も流れも、永劫に淨らかであつた。

——(完)——

附 錄
天目山の悲劇

（一） おゝ！ 燈が見ゆる

笹子の連峰を降りこめた雪は、たま／＼の日和に皓く輝いて、風も冷たき甲斐の山家には、多年の戦賦に疲れ果てた民の竈から頼りなく細い煙が寒々と立のぼるばかりであつた。疎林寒木、黙々たる鴉の聲に日が落つると、東八代、北都留の堺をなした天目山の麓路かけて、雪に籠れる莊の静けさが聾々と暗い影に抱きすくめられる。

時しも天正九年の冬。この寂しい村里の盡れから、山崩れの丘を南に雪沓の跡を拾ふて辿りゆく一人の旅人があつた。甲斐絹商ふ商人でもなく、鹿の通ひ路を飛ばす獵夫でもない。雪明りにすんと長い太刀を佩いてのし／＼と歩む黒

装束は、何處から見ても一廉の武士である。

「おゝ、あれに燈が見ゆる。……天の祐けぢや。槽なぞ無心して夜を過ぐさうわ」

連とてもなく呟きながら、足を早めて行きかゝると横手の岨から、猿の如く滑り落ちた人影がある。件の武士はぬつと立ちどまつて怪しき影の蠢めくのを見た。

「汝、この夜道を何處に往く！」

叱るが如く聲かけられて、却つて怪しみの人影がぎよつとしたらしく起ち上つた。

「そこな仁……咎められぬ。拙者も急ぎの要あつて木曾路へ参る途中、圖らずも道踏み迷ふての難儀ぢや。見受くればお身も旅人、打連れて、彼なる家の爐

へ急ぐまいか』

小兵ながら確かにこれも武士である。堪へ難き寒さに聲も打慄ふは、糧さへ満足に届かぬと見えた。

『うむ。それもぢやが……木曾路へとは耳寄り、拙者はその館に仕ふる金田隼人ぢや。してお身は何處からぢや』

『や、金田殿とな……お名は兼て承はる。拙者は織田が郎黨末永數馬でお座る』

天祐とでも云ふべき偶然の出逢ひに、兩人はづかくと歩み寄つて、頼母しに顔を見合せた。

金田隼人は先づ頭巾を脱いだ。虎髻厳めしく逆にはやして鏡をかけたやうな鋭い目は微笑を含んで

『扱て寒い事、われ等雪風に馴れた身にもずんと應へる。貴殿他國の衆、甲斐が嶺の雪には嘸や難儀召されつらう喃』

と慰め顔に言葉をかけた。赤ら顔の末永は齒の根の合はぬばかりに唇を慄はせた。

『いやもう。存じの外ぢや。殊に何度か雪に轉び握飯も失ひ申して喃、二日一宵、當もなく這ひ廻る心細さ、戰場に槍合すより辛う御座つたわ』

『然も存さう。……何が扱て、彼の一家へ急がうでは』

と誘ひかけると、思はぬ味方を得て氣のゆるんだ密使數馬は俄かに腹の痛みを覺えて其場にうじくと屈んで了つた。

『何とせられた。……喃』

『荐つての痛みぢや』

「悪い時にな。……一つ家までは程もないに。拙者の肩にか、らせられ」

「お情、お力を借り申す」

よろ／＼と肩に縋つて、足許を氣支ひながら二つの影は凍てたる雪の道を踏み出した。夜天の雲は月を包んで、遠く遠く谷間の水の音が聞える、五歩、十歩、遅々として進み行くと、峰を隔て、物凄く獣の聲が断續する。

「狼が吼ゆるけぢや」

「虚柄とて淋しう聞ゆる」

何氣なく語らひながら、いま崖鼻を廻らうとした途端、金田隼人の右手の拳は佩刀の束にか、つた。エイと叫んで肩振り離すと、不意を喰つてよろめく數馬の真向から、二つになれと斬りつけた。敵も然るもの、額を剝がれた血飛沫を拭ひもあへず

「卑怯ぞ！ 隼人」

と身をかはしてがつちりと抜き合せた。

「何故の無禮ぢや。吐せ」

「ワハ、ハ、ハ。白痴た、汝。……隼人と云ふたは良ぢや。その良に落ちた獲物何として逃さうぞ。観念せ。」

「扱こそ。木曾殿家臣と名乗つたは偽りか。この上はわれら刀の錆にする」

「舌長い！ 斃ばれ」

唸りを生じて打込む早業に、數馬は二つになつて倒れた。南無と片手に唱名して、血刀を鞘に納めた件の武士は、屍體の懐中を探つて一通の密書を奪ひ取ると、空しき骸を足にかけて慥と谷間へ蹴込みながら

「不感ぢやが是非もない。それも、これも主に仕ふる身の勤めぢや」

と云ひ捨て、その場を去つた。
雪を染めたる紅の花は亂れて、まざりと月照る峰の彼方此方に狼が呼び合ふて吼えるばかり。

《二》 嗚呼、然もあらう

「頼もう。……卒爾ながらこの家のうちへ物申す」

垣とでもない樹がくれの雪の一つ家、住む主さへ出で入らぬかして、積りし儘の雪の上には藁沓の跡でもない。

「何人ぢや。何の川ぢや」

物静かな錆びた聲が、板戸の裡から慙う答へた。

「これは旅するもの、雪に暮れて宿るべき樹蔭さへ御座らぬ。無禮ながら櫓の馳走に預かりたい」

「それは氣の毒。さ、づいと入りやれ。櫓をさす要もない心易い山家、誰に遠慮も憚りもないで」

「然らば宥され」

嬉しやとばかり板戸をあけて土間に入ると、荒壁に猪の肉など吊した風情、一目には獵夫の宿とも見るが、爐を隔て、机を置く主人の姿には何處やら床しい威が備はつて居る。——草履を解いて、膝行り寄り乍ら差覗いた顔と顔！
旅の武士は「や、」と驚いて身を退つた。

「御貴殿は小宮山殿に在さぬか」

「然云ふ其許は……」

主人の眉はビリ、と動いた。品によつては起たせぬと云ふ意氣が、片膝立てた身構へにも窺はれる。

「前川兵庫奴に御座りまする」

「ウム、前川殿か……これは又思はぬ對面ぢや。近うお寄りやれ」

「ハ、ハ。これにて御挨拶致しまする」

「その遠慮今は無用、楯に暖もりながら物語らうわ。さて聞きたい儀はさはあるぢや」

主人はいそいそと酒壺を取出して楯に暖めながら、珍客を待遇さうとする。

「其許、兼て木曾館への目付とあるに、忍んで夜道には譯ありさうな。入道義昌が變心どもあるか」

「御意にお座りまする。憎きは木曾館の上下、心を協せて織田殿内應と定りま

いた」

「然もあらう。はて怨めしい世に逢ふ事ぢや。その儀御主君御知らせあらせられぬか」

「拙者よりは屢々内報致し置きましたなれど、何等御手當もおはさぬよつて、斯ては機を逸す怖れと存じ、御注進の途中に御座りまする」

「いかい大儀ぢや……それ程の大事知り乍ら御手當のないとは……喃。お家も末ぢや。奸臣の虚勢を恃ませてのお振舞まことに本意ない。噫、故主君の在せしならば……」

はらりと落つる涙を押拭ふて、黙々と坐せる主人の髪の毛は、風も來ぬのにわなくと慄へて居る。——小宮山友信。この隠れ家に世を狭めたる友信は、信立入道取り立ての古剛者、四隣に武名を知られたる器重人であつたが、小山

田將監と事を構へて勝頼の裁断を仰いだ時、勝頼は長阪釣閑、跡部勝資等龍臣の奸言を信じて、友信を勘當して了つた。それは小田山將監が跡部長阪と結托して、剛直なる忠臣を斥ける策に出たのであつた。

（三） 事ありげな密書！

流浪の旅を嘆くのは凡俗の憂ひである。小宮山友信勘當と傳へ聞いて織田からも徳川からも、乃至勝頼内室の實家たる小田原北條までが侍大將として一城の主を迎へようとしたが、友信は耳をも藉さず、飄々として行衛を眩ました後は、此處の山家に匿れ住んで、主家の末路に心を碎いて居たのであつた。

又、前川兵庫は、甲府本城から木曾義昌の館へ目付として差遣はされてあ

つたのであるが、前に述べた様に入道義昌敵方に内通の意あるを察して密かに抜け戻る途中、圖らずも小宮山友信が山居に迷ひ込んだのであつた。今更に、思へば過ぎし長篠の一戦ほど惜しきはない。織田徳川と弓張りくらべて、勝目のない無理な戦に信立公遺愛の武將大半を討たれ、尙懲りすまに跡部長阪等の奸言に惑はされて我意募らせる暗弱な勝頼を、見捨ても遣らす末を案する友信の心の底には、唯々佗しい涙の湧くばかりであつた。

木曾義昌の反逆、差當つての大事はこれである。勝頼の荒べる心には、一揉みに揉み潰せとの事もなげに叫ばうなれど、義昌の背後には信長がある。家康がある。小田原の北條もある。怖るべき長蛇の軍は木曾の館に鎌首を擡けて甲斐の國府を覘はうとするのである。兵庫の途中血祭りにあけた密使の事を思ひ出して、懐を探つて一封の書状を友信の前に差措いて旨を告げた。

『いかさま事ありけな密書、披見せう』

封を濡らし、櫓の火に差よせて密と披いた書面に眼をうつすと、友信は「ヤヤ」とばかり顔色を變へて驚いた。

はて、密書には如何なる大事が認めてあつたであらう！

野路の小草の一葉にも裏表はある。況してや起伏定めなき亂世に城持つ衆の心ほど頼みにならぬものはない。昨日の味方、今日の敵、一夜にして掌返す賢愚の岐路に、空しく興亡の種を蒔くのがその昔の武人氣質であつた。義と云ひ、俠と呼ぶそれ等の總てが、唯單に弱肉強食の一語に盡きて居るのである。城を陥し國を擴げる爲に人馬を催ほし、利の爲には骨肉を犠牲にして顧みぬのが元龜天正の世の態であつた。(否、東西古今の歴史に徴して、凡そ人類争闘の終局の目的が皆この一點に歸著して居るの事實は、何人と雖も否定する事の出

來ぬ處であらう。)——斯く打紊れたる時勢を通じて、脈々として大和民族の血を躍らせたのは尊ぶべき武士道であつた。討ち討たる、兵家の勝敗の外に、消すべからざる不磨の光彩を放ち、日本三千年史を一貫して絶對の價値あらしめたものは、この武士道の大精神であつた。若し兵亂の巷からこの大道を奪ひ去つたならば、彼等將士が血を浴び生死を忘れて進退せる處のものは、全く意氣なき殺戮となつて了ふのである。武士道の重んぜられた時代！ その武士道の典型とも云ふべき甲斐武田の忠臣小宮山友信の隠れ家へ迷ひ込んだ前川兵庫が途中圖らず手に入れた織田から木曾の館(義昌)へ參らすべき密書と云ふを取出して櫓の火にかざし讀んだその瞬間の驚き!!。友信の眼は朱を濺いだやうに血走つた。

『不埒！ 忘恩の痴者!! 有るまじき振舞ぢや』

ふるぐと拳を慄はせて憤る無念の形相に、前川兵庫も釣込まれてぐいと一足踏出した。その煽りで櫓の灰がばつと立つ、暗い壁を氣味悪い蟲がちよろちよろと走る。

〔四〕 所詮は散行く花

「何と御座ります。お館不祥の企てども」

「然ればぢや。貴公。活きた眼に睨められた如く。來ん春陸月義昌入道手引きして織田徳川北條の大軍を誘ひ入る、密使と讀めた」

「すりや、陸月と申せば程も御座らぬ」

「安閑として在るべきでない。屹と覺悟せねばなり申せぬ」

「御出慮か!」

「所詮は散りゆく花の脆さ、せめては春に遅れまい爲の心やりに喃。……貴公は速やかにお館へ馳せ戻つて、届かぬ迄も主君御前にこの密書披露召され」

「心得申しました。……なれど、跡部長阪等の奸臣御傍にあつては、われ等が舌など必らず反古。この上は是非に共々御立越し下さりませう」

「否。俺は行くまいよ。ちと外に思惑もあるで」

無然として髯を擱んだ友信の胸中には、稻妻の如く閃めいたものがある。それは木曾入道義昌に對する念晴らしの一存であつた。憎しとも憎き木曾奴、信玄公以來重恩を荷ひながら、表は甲斐の味方と見せて却つて敵の手引をせうとは、武士の恥を知らぬ凡下ぞ。いで甲斐武田が滅亡に先立つて、彼奴を血祭に上げて呉れうと密かに決心したのである。

山居幾百日。この悲みに逢はうとて佗しい夢を嘆きはせぬ。何時かは主君勝頼の迷ひが醒めて再び晴れゆく嬉しき日を仰がふばかり、その樂みに惜からぬ命を長らへて居たのである。

然しそれも今となつては十日の菊である。

勝頼の心の窓の開くに先立つて、凄まじき雷雨は襲ひかゝつて來たのである。

要するに武田一族の滅ぶる時が來たのである。

友信の閉ぢたる眼には、信玄が世に在し頃の武田菱の旗風がまざくとしむやうに浮んだ。

「せめて、入道が首土産にして、地下九泉の先君の御前に出るぢや」

「然らば木曾路へ赴かせられるで」

「諾。成らぬ迄もが」

兵庫は世にも頼もしけに肯いた。——明けなば此處を左右に出發する事として、隠れ家の主人小宮山友信は貯への限りの酒壺を傾けて兵庫と共に汲み更した。

雪後の風は板戸を洩れて、身を切るやうに楯をめぐる、遠くの谷に雪崩する音も絶えて、雪の山家は地底へ沈み行くやうに静かであつた。

鐘を聞くべき便もない主客は、強かの酔ひ覺め心地肌寒く起出で、暖かに粥をす、つた。友信は密かに藏ひし重代の太刀を佩き、暖かう身仕度して幾日宛かの糧食まで腰にさけて軒を出た。

「住めば都、生じひの獵師どもに荒さる、も本意ないで、灰にせう」

楯に残りし餘燼を差火として、住み馴れた隠れ家に火をかけた。雪積む屋根

は濡りながら、煙の渦は柱を包んで、女机も本置く棚も、借しや紅蓮のちらちらと嘗むるが儘。

「われ等最期も斯くあらう?! 灰ぢやく。武田の御家も亂離骨灰ぢや」

忌々しげに咬く聲も思ひ捨てたる世の涯に慄えて聞えた。

さらば! さらば!!

主客は笠を傾けて、晨の雪を踏んで別れた。

〔五〕 動くな! 入道!

山又山の峽の細道、鈴鳴らしゆく驛路に荷駄さへ種な木曾の奥に、由緒久しき城を踏まへて重代の郎黨多く養へる木曾入道義昌、兼て織田徳川と心を通じ

て、甲斐の館を覆へさう企みが着々と捗どり、今は春待つ雪雲の切れ目ノゝに日の和むのを待つばかりであつた。

花には疎雪國の空も遙々。小田原からの密使饗應と云ふので、高樓の障子をさらりと開けての宴の正座に、ゆつたりと構ふた入道の眼は溢れるやうな喜びに輝いて居た。

「やがて春に逢はうする我等、いつまで恙る峽の奥にうづまくる要もないぢや甲斐の館を叩き潰いたら、骨休みに都の花ども見に罷らうわ」

「誠、御運の芽出度さ。欣ばしい儀でお座り申す」

既に戦捷の祝ひでもやるやうに、一座の郎黨どもに打寛いで芳酒を啜つた。主客ともに陶然たる酔ひに浸つて居る折柄、影の如くこの奥庭の端れの樹蔭へ忍び寄つた怪しの武士があつた。——黒頭巾に面を包んで程よき所に銃を構へ

た的は誰。云はずと知れた正座の入道義昌である。

「ド、ーン」

箭がへしの銃音と共に入道の悲鳴は起つたが、それは魂消る聲ならなくに、不意をうたれし驚きの叫びであつた。

「や、狼藉ぞ！ 搦め捕れ！」

應と答へて轉び出た木曾衆は、手にくくに覺えの剛刀を掴んで八方から曲者へ奔と迫つた。

「不敵な奴！ 名乗れ」

「遁れうとて遁さぬ。せめて亡き名を吐して死ねや」

血に乾きたる太刀抜きをばめて、ぢり、く、と寄る荒武者どもに圍まれながら黒頭巾の曲者はがらりと銃を投出した手に、繕ひもない野太刀の束を、丁と叩

いてすつくくと立つた。

「騒ぐな蛆蟲。……いま面拜ませて呉れる。へたばるな」

ぐいと頭巾を掴み捨てた屈強な武者振り。

「甲斐の館に鬼と呼ばれた小宮山友信、天誅の太刀振舞ふぞ！ 退けい」

言下に閃めく太刀の牙えに、前に進んだ一人は控と血煙のなかへ倒れた。

「手剛い敵ぞ。遠捲きにして射て取れや」

有繫は入道、ふらくと危なき酔を踏堪へながら鎗を小脇に庭先へ降立つて

號令する。それと見た友信の形相は阿修羅のやう。

「忘恩の入道……動くな」

遮る敵を蹴倒して眞一文字に馳せかゝると、義昌は早くも郎黨引つけて、十挺あまりの弓の手はきり、くくと満月の如く箭を番へた。友信は立縮みながら

無念の唇噛み破つて火のやうな怒の聲に耳朶も裂けよと叱咤した。

「いかに入道、先君が分けての御寵恩忘れ居つたか。今に到つての反逆、天罰を知らぬか。」

「言ふな友信。……先君の御恩は忘れぬ。なれど暗弱なる勝頼如きの旗下につ

ひて木曾源氏の首骨砕けうや……それしきの道理判ぜぬ小宮山ともあるまいに扱はお主死花咲かさう所存ぢやな」

「宜う見た入道。われ等武士道の正しきを踏んで先君御恩に酬るる迄ぢや」

「その覺悟殊勝ながら、甲冑も鎧はぬ身で鬼神なりともこの弓勢の箭面には立たれまい。敵し難き仕誼なれど、今日はこの儘見返し置く。……晴れの勝負は戦場で……喃」

友信は大きく背いて太刀を鞘に納めた。

《六》 危い哉、甲斐の館

入道は側を固めた郎黨の弓絃を外された。

嘗ては信玄公が馬前に、劣らず鎗を比べた身も、今は敵味方へ立別れて氣拙い顔を見合せねばならぬ。

「聞は貴公も、甲斐の館の首尾を損じて退散ぢやけ喃。その捨てられた身で入道を覘ふ忠節、有繫に小宮山殿ぢや。……何と想ひ返して明るい陽を仰ぐ心はないか」

「他物へ隨身せいとやぢ……か？」

「奈何にも、我等身にかへて一方の大將に推舉せうに……彼の泥舟に乗つて便

ない首途をするやうな館の運命、可惜忠節、草と枯らすは惜しいものぢや』

『ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。平に断わる。活くるも死ぬも御館の旗の下ぢや。……われ等

武士の面目は勝負によつて上下はさせぬさらばぢや』

友信は木曾の城門から、悠々として立去つた。

『惜しいもの喃。味方につくれば頼母しい手練者ぢやに、小氣味よい程骨が硬

いぞ』

入道は飽かず友信の器量を褒めそやした。

年の瀬のせ、らぎ寒く霜月も過ぎ師走となつたが、小宮山友信は甲斐の館に出仕しなかつた。——彼はいづちに堪難き憂悶の情を忘れんとして居たであら

うか。

これより先前川兵庫は、山の隠れ家に友信と別れ、館に戻つて木曾入道叛逆を申立てたが跡部長阪等は一も二もなく妨けて勝頼の耳へは入れなかつた。

危い哉。——毒酒に酔ふた埒もなき甲斐の館の夜長の夢に、やがて呪ひの人

馬の聲が押寄せるとも知るや知らずや。……甲斐の嶺の雪は冷たく陽に白けて異形の雲が千切れ飛んだ。

天正も十年正月となつた。戦亂の世にも尙改曆の儀式は嚴そかに執り行はせられた。事實に於て聲望のない勝頼も、甲斐武田の頭梁たる格式に恥ぢぬだ

けの國も郎黨も持つて居たので、松に明けゆく蓬萊の夢の初東風なよくと吹

きびぐる城中へ、きらびやかな來賀する侍があまる程澤山あつた。

「見よ。頼母しき家臣の列を。……これ程のもの一つになりて控へたりや。三河も小田原も怖る、事でない。芽出度い春ぢや喃」

血の多い勝頼は恚う云つて欣びながら年の初めの四五日を現なく過した。――

醉ふたる儘の武者聲あけて唄ひ喚くそれさへも咎めぬ嘉例、主君の恵みと打興する郎黨の心底は、果して勝頼が頼みに思ふほど堅固なものであつたらうか。忠臣姿を潜めて奸臣蔓る館の内外に身を楯とする健氣なものは幾人あらうか。

――束の間の春に酔ふて、秋風の寂しさを想はぬ暗愚な大將を、慙れと見つ、諫めようとはせず、身ひとつの康きを希ふ雑魚のやうな人影の搖らめきよ。

火桶戀しき山國の長閑けさ。それは幾日も續かなかつた。

突如！ 武田が館へ兇變の注進があつた。それは木曾入道義昌が先導となつ

て織田、徳川、北條の雲霞の勢が押寄せたからである。

「憎い入道奴、引捕へて八つ裂にせ」

勝頼は舌を慄はして叱咤したが、その憤りも驚ろきも身から出た錆、今に初まつた事ではない。去年冬空、前川兵庫が立戻つての進言を風馬牛に聞流さず先を制して木曾勢を潰して置けば、徳川とて織田とて、易々と仕かけはすまい。それを今更云ふた所で沈み行く日を招きかへすも同じ悔い、唯、唯、目前の敵に當るより外はない。

信玄在世の砌は、一刻にして千萬騎の懸引號令弓矢の神とさへ稱へられたそれに引かへ、勝頼が聲をかぎりに急ぎ立てし一夜過ぎても、家中は空しく狼狽すばかりで陣觸れの聲さへいどろもどろである。

「長阪を呼べ、釣閑は如何にしつる」

寝もやらぬ眼は火と燃えて、嵐のやうな怒聲の前に畏る／＼罷り出た一人が
「昨宵のうちに逃走致しまいたけで」
と答へた。

〔七〕 せめて最後の御供

「何と申す。……釣閑奴、失せたとか……勝資は、跡部は……な」
「勝資も亦一族を纏めて何所かへ落ちのきました」
「チエツ……不忠不臣な奴輩、什麼して呉れう」
真にこの瞬間の勝頼の胸中は例へがたき憤怒と悔恨に掻き棄されたのである。長阪あらば、跡部あらばと彼等二人を頼み切つて、父公の遺臣をさへ顧み

なかつた程の寵愛、それを忘れて戦の前に退散とは、云はう様なき人非人である。

「噫、今にして思ひ當る小宮山等が諫言。……われ等武運もいまは最後か、……生前釣閑勝資が首級見ぬが、唯一つの無念ぢやわ」
はら／＼と血の涙をはふり落して今昔の感に打たれたが、引つゞいての注進は、誰の退散、某の内通、一として傷心の種ならぬはない。平素から勝頼が部長阪輩の奸徒を愛して正義の衆に情なくせし天罰は茲に酬いて、お家の大事たる興亡の危機に際して我も我もと勝頼を見捨て、了つた。

散り／＼に散るよ落葉に霜は見えて、甲斐の山河は徒らに瘦せ枯れて行かんとする。——館の督促に勢ひ立つた軍勢は僅かに千人、これしきの小勢で海道三將が大軍に當らうなぞとは思ひも寄らぬ。兎も角も小山田信茂が居城に據つ

て軍容を整へようと新府城を立出でたその列のなかには、奥方も、若殿も、見る影もない馬の鞍に泣きながら滅びゆく館の武運を打嘆いた。斯くて辛やく田野の邊に差蒐つた時しもあれ、遙か後から馬を飛ばせて追縋る一騎があつた。駒を立て、憩らふて居た勝頼は早くも認め

『何者ぞ……凍々しい武者ぢやが』

と小手をかざして打見やる隙に映り近づいて來たのは、それよ前年わが前を斥けたる小宮山友信であつた。

『や、友信ぞ』

流石にわが不明を恥づる面伏せの唇を噛むひまに、友信はひらりと駒を乗捨て勝頼の前に平伏した。

『御勘氣蒙りまいたる友信。畏れながら参着。せめては主君御最期のお供お許

され下さりませうならば、忝なうお座りまする』

最期の供。——勝頼も泣いた。奥方も泣いた。並居る諸將の鎧の袖にもはらはらと涙が落ちた。——主君が捨てたる忠臣は後を慕ひ、恩寵ならびなかりし奸臣は主君を捨つる。……唯一筋と限られたる武士の道にも、慙うした差別はあつたのである。

『宜う参り呉れた。忘れは置かぬぞ』

勝頼は世にも嬉しげに友信を視た。

(八) 噫！ 父祖の國！！

風は寒くちら／＼と雪さへ雜る。

勝頼主従はたゞくと小山田の居城へ志したが不埒なる信茂は、俄かに叛いて入城を拒んだのみか、却つて道に逆茂木を積んで叛逆の鋒を磨いた。一行が止むなく此所をも見捨て、天目山へ迷ひ込んだ時には左右僅かに四十餘人に過ぎなかつた。

土屋昌恒と秋山光次は、勝頼の乗馬を曳き、阿部忠高と温井常陸は鎗を肩にして山路を踏む。殊に哀れなるは奥方公達、昨日までは錦の梅に隙洩る風さへ厭ふた身が笠もかぶらぬ眉寒く山風に吹きすくめられる。然りとて武門武士の習ひ、齒の根の合はぬ寒さにも、辛い悲しい一語すら慎んで何所までもと敗残の將に従ふ死出の旅よ!!

天目山の頂からは眼路遙けき甲斐の山々が眺められた。

「嗚呼。父祖の國！」

勝頼の膽に銘する最期の一念は、地下九泉に見ゆべき父祖の面影。——嘗ては海山の恩を擔ひし山僧共も麓の耕夫と心を併せて、山上へ敵を誘ふて来る。

「いまは早やこれ迄ぞ」

勝頼は鎧の上帯を解いて割腹の用意をしながら、奥方を顧みた。

「其方は氏政が妹、敵ながらも粗略はあるまい。山を下つて身を恙なうせ」

「何と御意遊ばします。兄とは申せ敵の情に活くるやうな卑たないものでは御座りませぬ。冥途までもお傍に侍りまする」

涙の下から擡げた顔には、動かすべからざる覺悟の色が見えた。勝頼は嬉しげに背いて、更に若君信勝に向つて

「父も母も此處にて果つる。なれど、其方は武田の家を興さねばならぬで、間道から陸奥へ落ち行けよ」

と諭したが若君は従はなかつた。

『私は落ちませぬ。甲斐武田の嫡々が父母を見捨て、走つたと聞えては、後の世までの恥で御座りまする』

『さりとて分別のない。父の言葉に反るか』

『御手討になりまして、此處は動きませぬ。父上母上のお供致しまする』
健氣とも、悼はしとも、勝頼は心に泣いた。

『それ程までに言ひ張るなりや、われ等と共に兎も角もせ。それにつけても其方は未だ元服の式が済まぬ。幸ひ重代の家實権無の甲冑こゝにあるで、着初めの式を擧げての後に、華々しく牛害しやれ』

今死ぬる身に元服とや。——武將の床しい心根は格別である。秋山光次は烏帽子親となつて若君に楯無の甲冑を着せ参らせた。

『やんやん。扱も芽出度く候よ』

『誰ぞある。一さし祝儀に舞はぬか』

主従相和してどつと動搖めく聲につれて、ひらりと扇舞はする昌恒の足拍子。——母なる奥方の心のうちは甚麼であつたらうか。世が世ならばと思ふにつけても詮なき今の身が嘆かばしい。額白に丹花の唇、死を決して平然たるわが子の姿に打見やるも今日を限りぞ。

山風はばらりと枯葉を捲く。その麓から押寄せた敵の勢は、この晴がましき光景を見て、

『あれなるは大将勝頼公ぞ。お首級いたゞきて功名せばや』

と喚き叫んで押寄せた。——一刻の歡樂郷は急に修羅場と變つた。

勝頼は鎧を扱いて群がる敵中に突いて入る。信勝も鎧の袖を鳴らしながら三尺太刀を閃めかして斬つて廻る。これに續いて必死の將士は死ねや〜と勢ひ猛く蹴散らかした。

（九） 勝頼主従の最期

三度までは敵を追ひ斥けたが、眼に餘る大勢、逆寄せの驟波をあけては遁さじと取りこめる。信勝は今元服を済ませたばかりの若木の花、生年茲に十六の終りを急いで、早や既に數ヶ所に手疵を受けた。

「父上、さらば！ 母上、おさらば！！」

さぞや敵に隔てられたる父母に名残を告げると、その儘一文字に斬つて入つ

たが、遂に巨樹の下蔭に躓き倒れて、名もなき敵に首を授けた。

後の小高き崖の上から、雨と束ねて射かくる箭は、いく筋が勝頼の鎧に立つた。——土屋昌恒は獅子奮迅の勢で敵をかけ惱ましたが、今や鎧襖に圍まれて進みも退きもならぬ危地に陥つた。勝頼は韋駄天の如く走りよつて

『われこそ武田勝頼ぞ』

名乗りかけて左右の敵を斬つて落し、昌恒を救はうと踏込む左右から繰出す鎧に咽喉と脇腹を刺されて、血煙のなかに壯烈なる最期を遂げた。行年三十七歳である。奥方はじめ多くの侍女も花の小袖を打棄して刃に伏した。小宮山友信も無論これに殉じた。

悲風慘たる天目山の春！

斯くして武田が跡は滅びたのである。

（完）

大正七年九月十四日印刷
大正七年九月十六日發行

□定價金四拾五錢□

不許複製
蒙古來

著者

平井駒次郎

發行者

東京市神田區駿河臺袋町十六番地
河野正義

印刷者

東京市牛込區後町七番地
日清印刷株式會社

發行所

東京市神田區駿河臺袋町
振替東京三〇〇九番

合資國民書院

歴史小説文庫

特製新裝美本 定價各冊參拾八錢 郵送料金六錢

平井晩村著

白虎隊

第一編

明治戊辰の役、官兵會津に迫るの時。紅顔花の如き三十六人、孤軍大敵をひき受けて奮闘し、國亡び城陷るや、城頭火あがるを見つゝ、枕を並べて及に伏しけむ。世に白虎隊の事蹟ほど悲しく勇ましくはた美しきものありや。晩村先生この絶好の材を捕へて一編詩の如きロオマンズを作る。

平井晩村著

少年忠臣藏

第二編

發しては萬桑の櫻となり、凝つては百鍊の鐵となる。我が武士道の精華ほど、世に壯烈なるはなし、少年忠臣藏は實に國民渴仰の龜鑑たる赤穂義士中、弱冠能く君公の仇を報じて、忠勇義烈の譽を萬代に傳へし、大石主税良金を傳せしもの。悲壯なる事蹟は晩村先生の靈妙なる描筆によつて紙上に躍動す。

歴史小説文庫

特製新裝美本 定價各冊參拾八錢 郵稅六錢

平井晩村著

浮田騷動

第三編

本書の主人公を長船紀伊守といふ。身は浮田家の老職の家柄に生れ、才氣煥發、主君秀家の若輩なるに乗じ、あはよくは岡山五十七萬石を我が所有にせんぞ欲し、常に酒色を薦め、竊に奸惡なる徒黨を結ぶ。太閤没して世は方に戦の秋、此の間、忠臣幡山隼人あり、硬骨漢花房志摩あり。波瀾重疊興味縦横。先づ一卷を手にして、獅子身中の蟲に喰はれたる大守秀家が没落の悲慘と、奸臣長船が末路を見よ。

平井晩村著

蒙古來

第四編

櫻さく絶東の君子國、富士ヶ根は萬代に搖ぎなく、大内山は無窮に泰平の色を湛ふ。我が邦土の金甌無缺を誇り得る嬉びは、比すべき何物もなし。されど嗚呼!! 想起す元弘四年の夏、北虜我秀麗の天地を覬覦して、來り犯す蒙古十萬の兵。邦家の前途は累卵の危か、風前燈か、而も我れに北條時宗あり……。晩村先生、得意の靈筆を揮つて此の英雄を描き、蒙古來一編を成す。熱血漲る諸君、正に一讀せざるべからず。

東京英語學會主幹 中村詳一先生著

笑ひながら 英語の讀方 覚えられる

中形洋裝美本 定價金五拾錢 郵送料 六錢

本書で英語入門者

英語は六つかしい、殊に獨學は六つかしい、
さ誰でもない。單語は字引を引きさへすれ
ば判るが、讀み方即ち文法がなかく判ら
ない、覚えられないといふのである。併し、
上手にさへ説けば、判らぬ事は無い。六つ
かしい英文法を笑ひ乍ら覚えさせる事決し
て不可能に非ず、その證據には先づ本書を
讀んで見るがよい。斯道の大家中村先生
が、此の書を書かれた。英語研究の書は山
ほどあるが、本書の如き好書は斷じて未だ
出た事がない。

本書の特色

「誰にでも判る」説き方が非常に
平明で尋常小學卒業生程度の學
力があるものならば屹度わかる
一人の教師と五人の學生との會
話の體裁になつてゐるので小説
でも讀むやうな面白さで「笑ひ
乍ら覚えられ」
説き方が根本的であるから英語
の知識が些こも無い者でも讀ん
で判らぬといふ事無い。即ち文法
の本書は英語の讀み方、即ち英語研
究者への注意が其他一般英語研
究者への注意も十分に説き方
飽迄も正則な組織的な説き方
此種のものにはよく見られるやうな
片的なものでは無い。

者亦研究の困難を嘆ざざる可し斷じて是れ空前の新機軸

文學士 生田弘治先生著

「ABCより」の續篇出てたり

誰でも 讀める 面白き 英文

洋裝美本 定價五十錢 郵送料 六錢

栗鼠ミグリーピング・フィッシュ云ふ
があつた。グリーピング・フィッシュ云
ふのは、馬來半島に居る魚で、鰓を動
かして歩いたり、攀ぢ登ることの出來
る奇態な能力を以て居るものである。
或日、此の栗鼠の妻君が病氣になつて
鶏の卵をやればよいと云ふことが分つ
たが、それを求めることが出來ぬ。そ
こでグリーピング・フィッシュに相談す
ると、そこは友達甲斐に、ちや一つ命
懸けて力を添へようといふことになつ
た。それからグリーピング先生いろい
ろ頭を悩まして奇策を考へ出し、さう
さう目ざす卵を求めて友達夫妻の病
氣を直してやる。

斯ういふ面白い呑氣な話を集
め何人にも分るやう親切極ま
る註解を施した本です

「ABCより」を讀で始めて英語の如何なるも
のであるかを知つた人々は、更に初歩の英文
を讀んで見たいと云ふ希望を起され、さうい
ふ本を出版して呉れと頻々申込みされる。そこ
で本院は、特に生田文學士を煩はして新たに
『面白き英文』を公にすることとなつた。漸
く英語のいろはを覺えた人の讀むに最も適す
るものである

十版月餘にして賣切れ **十一版** 出来す!!

學生文庫第六編 文學士 大日本國民中學會講師 生田長江先生述

英語入門

A B C より

洋裝美本
定價 四十五錢
送料四錢

●新時代の青年は必ず外國語を知らざるべからず

AもBも知らない全くの初學者に完全英語を獨習出来る本

●中央新聞 學生文庫の第六編なり此書は英語の何物なるやを全く解せざる者に向つてエービーシーの初めより教へ込む目的とせる物にせしめば誠に英語の何物たるかは了解し得らるべし

●本書に依て英語を獨習し新時代の新知識を獲よ

無限なる算術問題解法を根本より改版して

更らに完全なる本書を出版せり

兵庫中學校教諭 深田慶治先生著

最新算術問題解き方

中型總クロス
定價金壹圓
郵税金八錢

□此際申込者に限り特價金八拾錢 □

近頃の出版界で「算術問題解法」くらゐ賣れた本は少ないと云ふ、いくら印刷して直ぐ品切となる。忽ちにして十八版を重ねるの盛況に達した。さて斯う賣れると本會は心配になる。世間では此の本に對して斯く迄囑望し期待するのであるから、此の囑望此の期待に負かないやうな完全な立派な本を提供しなければならぬ。そこで本會は今回一大英断を以て、断然「算術問題解法」を發行することゝなつたのである。これは、完全な期し完璧な期しての出版である。解き方を算術全部に互つての新なる問題を集め、最も親切に其の解き方を示してある。算術解法に至る算術全部に就て最新なる問題を集め、最も親切に其の解き方を示してある。算術解法最善の書は斯くして出版せられたのである。

3/
157

8.12.9

終

